斯やうに申してをりまる。』

とおべつかを呈した。元就は、苦り切つて、

『及びもつかぬ事！　自分は、恥づかしく思つてをる。』

『何故でござりまする？』

『湯武の世には、お前のやうな諛ひ者はなかつた。』

との言葉に、某は、赤面して恥ぢ入つた。

♡男子の行爲、おべつか位ゐ醜いものはない。おべつか屋には、決して本心の實はなく、その頭は、私心、私慾で充されてゐる。それを聞いて喜ぶとは！

泰時訟を聽く

＝いさかひは實に山彦の谺かや
　我が口故に先も喧まし＝

北條泰時は執權就職以來、日毎、勉めて役所へ出て、庶務を治めるのに、群長を待つてと恭謹、訟を聽くこと明恕で、治績、日に擧つた。

或る時、訟へを聽いた。双方、對決といふので、最初の程は、口角、泡を飛して論じ合つてゐたが、やがて、一方が、

『私も、只今迄は、自分の言條を善いと思つてをりました。さては、訟へにも及んだのでござりまするが、今初めて、自分の非を悟りました。この上は、一言も申し上げることはござりませぬ。』

と屈服した。泰時は、感心して、

『この喧嘩は、成程、お前の敗ちや。理非によつて決斷しやう。但し、自分は、これ迄、數多、訟へを聽いたが、お前のやうに、即座に理に服する者を見たことがない。實に感心ぢや。）

といつて、これに恩賞を與へた。

泰時は、何時も、こんな風に訟へを聽き、恩威を兼ね施した。その結果、後には、追々、訟へもなくなり、訟庭も、閑散を極めたといふ。

♡爭ひの慾から起ることは、誰れも知つてゐる。正しくは、慾の爲めに理を忘れる所から起る。人々互ひに、慾によつて理を棄てず、理によつて慾を制する

やうならば、世に爭ひの種を絶つは必定、裁判所も、無要の長物になるであらう。

梶子と百合子

＝煙管さへ心の脂を掃除せず
　雁首ばかり磨く世の中＝

梶子は、京都祇園林の茶店の女主である。歌の上手で、家集、題して梶の葉といふ。十四の年の暮に、歳暮戀を、

　戀ひ戀ひて今年も徒に暮れにけり、涙の氷明日や解けなん。

又た夜霰を、

雪ならば梢に留めて明日や見ん、夜の霰の音のみにして。

これは、秀逸との評のあつた歌である。立春の歌、

長閑けしな豊葦原の今朝の春、水の心も風の姿も。

百合子は、梶子の茶店を受け繼いだ女である。これも、歌を好んだけれど、梶子の比ではなかつた。たゞ、

『茶店の女で、歌を詠むとは、珍らしい。』

といふので、田舍迄も名が聞えた。娘の町子は、畫家大雅の妻になつた。

♡女は、虚榮心が强い。さては、容貌、服裝に腐心し、顏には紅粉を粧ひ、身には錦繡を纏つて、得意がるのである。その癖、頭のからつぽには頓着しない。

男も、女も、眞の榮譽は、頭に在る。容貌や服裝に費す心を、少しは頭の養成に使つて、歌の一つも稽古するのは、女にも無駄ではない。望ましいのは、虚榮よりも實榮である。磨くべきは、雁首よりも心の脂である。

池大雅の奇行

＝念々の塵と芥に纏はれて
濁り江を出ぬ人ぞ儚なき＝

畫家として有名な大雅池氏、諱は無名、字は貸成、通稱を秋平といひ、書畫には、往々、九霞山人と書いた。京都の人である。

爲人肅敬、榮辱の爲めに心を動かさず、禮法に簡單で、往くべ

くして往かず、答ふべくして答へず、而も、これを義に顧みて、未だ曾て、失ふ所なく、取予、得失に於て、恬如としてゐた。平生の行事、多く人の意表に出たので、世に奇人の目があつた。

奇行の一二をいふと、漢法の山水をやり出した頃、扇子に畫いて、近江、美濃、尾張の國々を賣つて歩いたが、怪しんで誰れも買はない。空しく京都へ歸らうとして、近江八景の一つで知られた瀬田の橋を渡りかゝり、全部、湖水へ投じて、

『斯うして龍王を祭るのぢや。』

と、平氣なものであつた。

或る時、大阪へ行くのに、筆を忘れて、家を出かけた。妻の玉

瀾は、それと氣づいて、跡を追つた。そして、建仁寺の前で追ひついて渡すと、大雅は押し戴いて、

『どこのお方か。よく拾つてくれました。』

といひ、その儘、別れて行つた。妻も、無言で家へ歸つた。

江戸へ下つた時、某侯の邸内に、知人のあるを幸ひ、そこに泊つた。六月八日になると、

『今日は、祇園の社の御輿洗ひぢや。さあ、その眞似をしやう。』

といつて、紙で人形を作り、灯を點し、囃しながら、邸内を廻らうとした。侯の世子が、これを見たいとのことで、

『早く持つて參れ』

との使者が來た。大雅は、囃しに紛らかし、聞えない風で、そこゝを廻り歩いた。世子は、

『何故、持つて來ぬ？』

とむづがる。その都度、使者がある。大雅は、

『はい、只今、參ります。』

といひながら、故意とそれを燒いてしまひ、

『飛んだ事をした。祇園神社へと思つたのぢやから、人に見せることを、神樣がお嫌ひなさるものと見える。』

と、冷然としていつた。それが爲めに、憎まれて邸を追ひ出された。大雅は、立退の命を聞くと、

『いや、然うぢやろかい。』

と一笑した。

或る金持から、畫を賴まれたが、月日を經て果さず、使者の來る毎に、

『近日！』

とのみ答へた。或る日、小僧が來ると、やはり出來てゐない。小僧は、大に憤慨して、門を出ながら、

『この死繪師め、幾度となくむだ足をさせやがる。己惚か、怠りか。抑も、人を馬鹿にしてゐるのか。』

と罵つた。それが耳へ入ると、急に走つて呼び留めて、

『お前の言葉は、道理ぢや。俺が惡かつた。』

と謝し、早速、筆を染めて與へた。

最も奇とすべきは、石刻の十三經を得やうとして、年來、心にかけ、漸く百貫の錢を貯へたが、書肆では、なかなか賣らない。大雅は、嘆息して、その錢を祇園の社へ奉納した。時に、社殿修造の事があつたからである。その時の樣子といふは、大きな蓆の袋に、神輿の紋の巴を畫き、十貫文づつ十にして、門人共々、禮服を着け、青竹の棒で差し荷つた。社司が、

『お名前はと？』

尋ねても、

『名は、出さぬことに願ひます。』

と固辭し、强ひらるゝに及んで、玉瀾と記した。

六如上人とは、昵懇に交はつた。大雅の遺像に題した上人の詩に、

鶉衣蓬髮意怡然。　言語近ㇾ禪形似ㇾ仙。
避ㇾ世仍懷濟ㇾ世志。　賣ㇾ山不ㇾ蓄買ㇾ山錢。
襪材滿ㇾ屋纔容ㇾ膝。　川字成ㇾ腔時弄絃。
至境深心誰可ㇾ會。　空令二姓字藝中傳一。

（鶉衣、蓬髮、意怡然たり。言語は、禪に近く、形は、仙に似たり。世を避けて、仍ほ懷く、世を濟ふの志。山

を賣りて、蓄へず、山を買ふの錢。襪材、屋に滿て、纔かに膝を容る。川字、腔を成して、時に絃を弄す。至境深〳〵、誰れか會す可き。空しく姓字をして藝中に傳せしむ。）

安永五年四月十三日、眞葛ケ原の草堂に終つた。年五十四。病氣に罹ると、

『今度は癒らぬ。』

といつて、一切、藥を服まなかつたといふ。

○これが奇人であらうか。これ、眞人である。汲々として、名利をこれ求め、內容のない形式道德に囚はれ、世上の習慣に默從して、平々凡々、極めて低

級なる生活を營むのを常とする、世間一般の頭からいへば、大雅の一言一行は、すべて奇であつたであらう。その人は、奇人であつたであらう。けれど、世間が間違つてゐるのである。一つ目小僧が、二つ目の人間を奇とし、捕へて見せ物にするの類である。

玉瀾女史の事

＝美しき心の中を譽められよ
　　姿形は左にも右にも＝

大雅の妻町子が、祇園林百合子の娘であることは、前に一言した。大典禪師の墓誌に、「夫の行ひに配す。」とあるが、その趣きは、

夫の遺した筆を持つて行つて、奇妙な挨拶に接しながら、無言で歸つた一事にも判る。夫に學んで、畫を能くした。玉瀾と號したのは、柳澤淇園の號玉桂の一字を貰つたのである。

和歌は、夫と一緒に冷泉卿に學んだ、初めての參邸に、處柄といひ、名の聞えてゐたのに、お内の女房たちは、

『何んな女でせう？』

と噂し合ひ、今か今かと待つ中、玉瀾がやつて來た。見ると、糊の硬い木綿衣服を着て、魚籠を提げた樣子が、何の事はない、草鞋を穿かない大原女の如くである。女房たちは、案外して、いふ所を知らなかつた。これ亦た、榮辱を心としない夫の行ひに配

するもの。

大雅夫婦が、冷泉邸へ參つて、和歌を學ぶやうになつたのは、最初、卿が、招いたのである。その上、富んでゐるわけでもなければ、假初の禮儀だけで濟むのを、他の門弟にも勝つて、季節々々の謝物を調へて、卿へ贈つた。

『歌は、彼れの氣象に應ずるやうに添削してやつた。』

卿の言葉である。

又た、卿から、戯れに赤前垂を與へられると、春は、それを締めて、母の名殘の茶店へ出ることもあつた。

夫大雅は、時々、三味線の與といふものを彈き、寂びた聲で歌

つた。すると、町子は、古びた筑紫箏にかけて彈き、それに合せて樂しんだ。筑紫箏の興も能くしたとか。夫が亡くなると、數年の後ち、町子も死んだ。

♡男でも女でも、頭の空虛な、無學、無藝な者程、顏に紅粉を粧つたり、身に美服を纏つたり、金時計よ、金指輪よと、やたらに外見を飾りたがる。「馬子にも衣裳。」の理から、外見を美しくして、頭の空虛を蔽はうとする、一種のごまかし手段であるが、白粉の剝げる如く、ごまかしも剝げる。寧ろ、生地で押し通した玉瀾を高しとしなければならぬ。

佛行の淡生涯

＝事もなく渡らるゝ世を我れと我が
事を作りて苦しむぞ憂き＝

佛行坊敬已は、元と、江州日枝山無動寺善住院の一代であつたけれど、院務を厭ひ、まだ、中年の頃、坂本へ隱居し、律儀を保ち、只否、念佛の一行に歸した。俳諧が好きで、佃坊と親交があつた。その句に、

蚊一つに施しかぬる我が身かな。

淨土に志を決した身にも、流石、我執の離れ難いのを、自ら戒しめたものとか。

或る日、佃坊が訪ねて往つた。雜談數刻、大分、空腹になつて

來た所で、

『門前に蕎麥屋がございます。こゝへ取つて食べませうか。面倒と思し召すなら、あそこへ參りませうか。』

と尋ねると、佛行坊は、少時、首を傾けて思案して、

『門前へ行けよ。』

とばかり、平氣であた。生活ぶり、交際ぶりの簡易なことは、萬事、この通りであつた。

寶曆六年四月十七日、弟子の取り出す自畫像に、

往かう往かうと思へば何も手につかす、往こゝれ西の花の臺に。

と書き、西に向つて合掌して、息を引き取つた。

♡生活は、簡易なのがよい。來客があるからといつて、その都度、酒肴を調へる必要はない。けちなのではない。煩はしさを厭ふのである。餘計な手數と時間とを費すことを忌むのである。

佛行と山法師

＝足ることを知れば安樂世界にて
佛のかごにのりの近道＝

或る年の春、比叡山の僧が、大勢、佛行坊を訪ね、今を盛りの櫻を賞めると、坊は、

『この花の散らぬ中に、今一度、來るがよい。』

と告げた。

『きつと伺ひます。』

と約して歸り、他日、誘ひ合つて行くと、終日、茶を出されるばかりで、何の待遇もない。長い日も、漸く暮れかゝつたので、

『今日は、花見にとのお招き故、たゞではあるまいと思ひましたが、案外しました。』

と、僧等は、稍や不平顔である。坊は、忽ち眉を顰めて、

『さてもさても、苦々しい山法師共ぢや。自分の若い頃迄は、然うではなかつたぞ。こんな結構な花を見ながら、尙ほ慊らいで、

飲食を求める法があるものか。そんな足ることを知らぬ心では、山王や大師の冥加も、よもあるまい。』

と叱りつけた。一同は、花の興も醒めて、すごすごと山へ歸つた。

♡人間幸福の訣は、足ることを知るに在る。足ることを知らない心には、月も、花も、空しく照り、空しく咲くに過ぎない。今の人は、金と名との二つを幸福の具體化されたもののやうに思つてゐるが、足ることを知らない心には、却つて苦勞の種である。

快男子可之助

＝自ら道は開けん世の爲めと
たゞ一筋に勇む誠に＝

長曾我部元親の子を信親といふ。生れた時、父元親は、織田信長を鳥帽子親に乞ひ、信長の名の一字を貰つて、斯くは命じたのである。

當時、信長と元親との間には、面識がなかつた。元親は、その臣中島可之助といふを使者として、安土へ上らせた。可之助――奇妙な名である。「可」といふ字は、手紙によく使はれるが、可相成、可被下など、何時も、他の字の上に立つ。人も、人の上に立つのでなければならぬと、氣を負うた彼れは、斯くは名乗つた。

今、勢威赫々たる信長の前へ出ても、なかなか負けてはゐず、主人元親の武勇を賞め立てゝ、萬丈の氣焔を揚げだ。

強情我慢の信長は、片腹痛く心得て、

『四國の島の中で、纔かの武功を立てた位ゐが、何程の事か。四國猿といふが、元親は、猿ではなくて蝙蝠ぢや。鳥なき里の蝙蝠ぢや。』

と冷笑した。可之助は、憤然として、

『否、蝙蝠ではござりませぬ。』

『やはり猿か。』

蓬萊島の寒天でござりまする。』

と、我れにも人にも解からないことをいつて除けた。

信長は、笑ひながら、

『よしよし！　其方は、四方に使して君命を辱しめぬ男ぢや。主人元親の人物も、思ひやられる。』

といつて、その乞ひを容し、可之助には、數々の引出物を取らせた。可之助は、得々として歸國した。元親は、その勇氣を賞め且つ滿足した。

♡智勇兼備といふが、智は、往々、勇から生ずる。智勇兼備が難かしければ、寧ろ、勇を擇ぶべきである。

成瀬の心がけ

＝飢ゑて死ぬ人も多かる世の中を
箸執る度に思ひ出せよ＝

關ヶ原役の後ち、徳川の士成瀬吉右衞門は、山城伏見にゐた。所へ、在駿府のその子隼人正から、金を贈つて來た。

『旨い物でも召し食れ。』

といふのである。けれど、吉右衞門は、その金を居室の天井に吊つて置いて、容か來ると、

『旨い物を食へ』といつて、隼人からあの金を贈り越したが、あれ

を見ると、美味よりも結構ぢや。』

と笑つた。

大阪冬の陣が濟むと、隼人の子某が來た。吉右衛門は、

『今度は、先づ片づいたが、今に、復た、事がある。その時、良い馬を買へ。廣い江戸にも、金二十枚の馬は、餘りゐまい。さ、これをやるぞ。』

といつて、二人の孫に、各の、金二十枚づつを與へたとか。

♡元龜、天正から、德川氏の初年へかけての武士は、粗衣、粗食に甘んじ、極度に儉約して、金を貯へ、一朝、事が起ると、惜しげもなくそれを投げ出したものである。今の世にも、極度に儉約する者はあるが、事に臨んで、出すことを

しない。その儉約は、實は、吝嗇である。泰平の今日、冬の陣も、夏の陣もないが、金を出すべき方面は、幾らもある。公共事業、慈善事業、皆、金を要するものばかり。所が、今の人は、出さない。

明慧の聞違ひ

＝見る人の心々に任せ置きて
高根に澄める秋の夜の月＝

北條泰時に無慾を敎へた栂尾の明慧上人が、或る時、道を通ると、河で馬を洗つてゐる男が、

『足！　足！』

といふ、上人は、立ち停つて、

『これは、まあ、貴いことぢや。宿執開發の人ではある。阿字々々といつてゐる。』

と感心し、言葉をかけて、

『何方のお馬かの？　餘りの貴さに、尋ねるのぢや。』

といふと、

『はい、府生殿のお馬でござる。』

男の答へに、上人は、益す感心して、

『それは、めでたい事ぢや。經に、「阿字門一切、諸法本不生。」とある。嬉しい結縁をした。』

といつて。感涙を拭つた。

○足を阿字と、府生を不生と、明慧上人、飛んだ聞き違ひをしたものであるが、上人の高僧であつたことは、この間にも窺はれる。孔子の所謂る、「君子は、義に喩り、小人は、利に喩る。」の理であらう。聞き違ひ、見違ひ、凡そ事を間違へるにも、善い方、立派な方へ間違へるのでなければならぬ。

豊公の無造作

＝見る人も見らるゝ人も假睡の
夢幻の浮世ならずや＝

豊臣太閤の馬の口取の某といふが、請うて京都柳の馬場に遊廓

を設け、市中の遊女屋を一纏めにした。即はち、遊廓の初めであるとか。それの出來た時、太閤は、或る夜、頬冠りをして、一軒一軒、遊女屋を覗き歩いたとのことである。

御所の能へ行く途中、女子供の集まつてゐるのを見ると、馬上から言葉をかけて、

「お能があるぞ、皆な、見に來い、見に來い。」

と勸めた。

立花宗茂が、銀子百枚を臺に載せ、それを進物として、大阪へ來た。そして、城内の一室に控えてゐると、奥から、太閤を眞つ先に、大勢の人が、騒々しく走り出た。太閤は、帶もしだらで、

後ろには、太刀を捧げた尼の孝藏主もゐる。乳人に抱かれた秀頼もゐる。何故の騒ぎかといへば、秀頼の慰みに飼つてあつた雀が逃げたのであるとは、何の事！

太閤は、忽ち宗茂を見て、

「お、、、左近將監が。これは珍らしい。」

「お見舞に上りました」

「太儀！　太儀！　この銀子を土産とな？　過分に思ふ。」

といつて、その一枚を取り、

「改めて、殘りを其許に進ぜる。京都は、面白い處ぢや。見物して歸られよ。」

○何たる無造作であらう！　秀吉は、決して尊大ぶることをしなかつた。左右、人は、尊大ぶりたいものである。少し金が出來るとか、地位が高まるとかすると、直ぐ尊大ぶる。所謂る、威厳を保つといふわけであらうが、威厳は、いはゞ人間の眞價から發する光輝で、外部から喰つけるべきものではない。又た、喰つけられるものでもない。頭はからつぽ、人間として三文の價値もない者が、やたらに尊大ぶつた所で、以て愚人を欺くには足らう。識者の眼には、甚だしい滑稽事である。眞の威厳は、人間の眞價に在る。無雜作の中に在る。例へば、秀吉のそれのやうに。

本阿彌嘆服す

＝高殿の高き姿もその本は

礎よりと知れよ人々＝

刀の鑑定に長じた或る大諸侯が、或る時、伺候した本阿彌に、無銘の古い刀を見せて、

『これは、相州の正宗ぢや。』

といはれる。本阿彌は、左視右視して、

『否、志津と見えまする。なかなか、正宗ではござりませぬ。』

と合點しなかつたが、

『否、正宗ぢや。其方に預け置く。よくよく研いで見よ。何時でも、正宗になつた時、返して寄越せ。』

との言葉に、心得難くは思ひながら、

『では、お預り申しまして……』

と、家へ持ち歸つた。そして、精々、研いで見ると、見込の通り、志津に似た所は見え出したが、何としても、正宗ではない。

然る程に、その候は、世を去られ、次の代になると、本阿彌がやつて來て、

『お預けの刀は、果して正宗になりました。今更、先殿お鑑定のお強いのに、何れも恐れ入りました。何卒、お受取下されませ。』

といへば、家老たち、

『して、その仔細？』

『不思議な事に、或る男の後生話から、正宗になりました。平素

手前共へ心易く出入する老人がございまする。何時も、珠數を手にして、後生を願つてをりましたが、或る時、來ての言葉に、この頃は、後生の願ひ方を變へました。今迄は、間違つてをりました。この荒凡夫の身で、俄かに佛にならうと願つたとて、何の、佛になられませう。佛にならうとならば、先づ、善い人になるやうに願ふがよい。善い人になつてから、佛を願つたら、或ひは、佛になる便もありませうと、そんなことを申しました。手前は、それを聞きまして、成程、道理な事ぢや。あの刀も、直ぐに正宗にしやうと思つて研ぐから、却つて正宗にならぬのであらうと氣がつき、一段近い志津にして見やうと存じまして、志津を志して

研ぎまするとやがて正宗に似て參りました。さてこそと、愈よ心を入れて研ぎ上げました所、今は、正宗になりましてござりまする。』

と語り、一同を感心させたとか。

○何事にも、次第、順序がある。卑近な所から始めて、徐々に高遠の域に至る、これ、精神修養の順序である。最後の目的は、聖人、君子、英雄、偉人になること、即はちそれであるが、途中に於ける卑近な所を捨てゝ置いて、一足飛びに、最後の目的地に達しやうとしたとて、それは、到底、徒勞に屬する。

文晁机上の虎

＝我が道を我れは守らん世の中の人の言葉は左いへ右いへ＝

畫家の谷文晁は、机の上に、何時も張子の虎を置いてゐた。門人が、その理由を尋ねると、

『この虎は、年中、首を左右に動かしてゐる。而も、制しても止めねば、促がしても急がぬ。日となく、夜となく、己れの欲する所に從つて首を動かし、人の言葉や思惑には頓着しない。畫家、文人なぞには、この心得が肝腎ぢや。』

と答へた。門人等は、成程！と合點が行き、多少、悟る所があつた。

○盲の千人に對して、目明十人、或ひは一人位ゐの世の中である。趣味、理想を以て立つ者が、愚人の言葉や思惑に頓着して、何うなるものか。

信綱恭敬の事

＝形より心を矯める道もあり
衣一つも眞つ直に着よ＝

松平信綱は、出仕の時も、家に在る時も、決して裏付の上下を着なかつた。その言葉に、

『人の心は、服裝によつて變る。出仕しても、心に恭敬を存せずには、忠勤を盡しかねるが、それには、服裝から氣をつけて、恭

敬を忘れぬやうにする。自分に於ては、斯くせねば、忠勤が出來ぬ。』

とあつた。

○果して然らば、今の若い者たちが、男は、俳優を學び、女は、藝妓を眞似て、爭つてにやけた服裝をするのは、何うしたものか。曰く、曰つたもの！

西郷翁と食味

＝蛙め等早く井戸から這ひ出して
空の廣さを何故に仰がぬ＝

西郷南洲、或る日、弟從道を日本町濱町の假寓に訪ぬると、生

憎の不在に、女中を呼んで、

『腹が空つた。飯を食はせてくれ。急ぎぢや。』

と命じた。女中は、早速、豆腐汁を作つて供した。南洲は、その幾椀かを快喫した。

所へ、従道が歸つて來て、同じくその豆腐汁を食ふと、殆んと湯煮のやうで、その不味いことは夥しい。箸を投じて、

『水臭いではないか。食はれるものではない。』

と女中を叱り、南洲に向つて、

『不味かつたでせう。お氣の毒でした。』

と、女中に代つて、疎忽を詫びた。

けれど、南洲は、一向平氣なもので、

『汁の甘い鹹いは、いふに足らぬ。飯が食へれば、それでよい。こんな些事の爲めに、召使を叱るのは、よくないことぢや。』

と、あべこべに従道を戒しめた。

南洲は、自宅に在つても、曾て、食物の爲めに、家人にぐづつくことをしなかつた。食物の目的は、以て生命を繋ぐに在る。この目的に適ふ限りは、他は何うでもよい——斯う思つてゐた。

♡人間、問題なしに生きてゐる者はない。何を問題とするかは、人によつて違ふ。大人には、大問題があり、小人には、小問題がある。豆腐汁の甘い鹹いを問題にするには、南洲は、餘りに人物が大きかつた。

西行眉を顰む

＝我れと我が世界を狹くする故に
　左右他人が邪魔になるなり＝

後德大寺實定は、寢殿に鳶を止らせないやうと、繩を張つた。

西行は、それを見て、苦々しく思ひ、

『鳶かゐたとて、何でもあるまい。實定卿の心持ちは、この一事で解つた。』

といつて、その後は、曾て後德大寺家へ行かなかつた。

♡屋根に鳶が止つたとて、何の邪魔にもなりはせぬ。それをも迫ひ立てるのは、

心に優し味がないのである。薄情なのである。邪慳なのである。鳶も、鴉も、齊〻く法界の衆生ではないか。邪魔にして、その樂みを妨げるのは、心のない所爲である。

綾小路宮の情

＝世の中に生きとし生けるものは皆
　たゞ玉の緒の長かれとこそ＝

龜山天皇の皇子性惠法親王、綾小路宮と申された方も、その小坂殿の棟に、一度繩を引かれた。吉田の兼行、それを見て、後德大寺實定の例を思ひ出し、稍や不快に思つてゐたが、人の話に、

『屋根に鴉がゐて、頻りに池の蛙を取る。それを悲しまれての事ぢや。』

とあるのを聞いて、

『さては、貴いお心がけではある。』

と少からず感心した。

♡人の愛は、禽獣に迄及ばなければならぬ。

正則國除かる

＝限りあれば吹かぬも花は散るものを
心短き春の山風＝

福島左衛門大夫正則は、關ケ原の軍功によつて、安藝、備後の二個國を授けられ、尾張の清洲から廣島へ移つたが、元和五年六月、國除せられ、信州川中島の謫地に、落莫たる晩年を送つた。

事の次第は、元和三年、廣島に洪水があつて、城の三の丸迄浸水した。折柄、參勤として江戸に在つた正則は、翌年、歸國に臨み、本多上野守に迄、

『城普請が致したい。然るべくお取計下されよ。』

と頼み入れた。上野守は、

『機を見て、お上へ申し上げやう。』

と答へた。正則は、その儘、歸國した。

所が、待つことこれを久しうして、何の沙汰もない。飛脚を以て、再び屆け出た。上野守の返辭は、やはり、

『機を見て、お上へ申し上けやう。』

といふのであつた。

然るに、正則は、待ち倦んだのか、他に餘儀ない事情があつたか、五年の正月から、無斷で普請に取りかゝつた。

所が、武家法度の中に、「諸國居城、修補たりと雖も、必らず言上すべく、況んや新儀の構營、堅く停止せしむる事。」といふ個條がある。正則の所爲は、正しくこの個條に背く、その上、性質が荒くて、數多、罪のない者を殺し、政治の仕方が惡いとのことで

二代將軍秀忠上洛の際、然うした嚴命が發せられたのである。

『情愛のない主從は、名は主從ながら、實は仇讐である。彼れが此れを倒さなければ、此れが彼を倒す。要するに强い者勝ちといふ結果に及ばなければならぬ。』

福島丹波など

＝玉黃金そは物ならず武夫
寶の寶義の一字なり＝

福島正則國除の令を發すると同時に、幕府は、安藤對馬守重信を受城使とし、隣境の諸侯にも、それぞれ、その手配を命じた。

この事が、廣島へ聞えると、長臣福島丹波は、早速、一藩の士を召集して、

『殿から預け置かるゝこの城、普通には、縱ひ將軍公の仰せにもせよ、渡すことは出來ぬ。けれど、備後殿のお爲めも思はにやならぬ。それを思つて、寧ろ速かに渡した方がよくはあるまいか。』

と提議した、備後守は。正則の子である。上月文之進は、膝を進めて、

『人は、如何にもあれ、拙者、本丸を預かる上は、命のあらん限り、斷じて人には渡されぬ。』

と頑張つた。丹波は、稍や不滿げであつた。

所へ、村上彥右衞門が、帳面を出して、

『以上兩説の中、何れへ同心するか、別々に判形せられよ。』

と告げた。

酒井主膳は、丹波の甥である。座を起ち、鎌田主殿を呼んで、

『何と思はるゝ？　丹波は、拙者の伯父ぢやけれど、上月のいふ所が、道理ではないか。』

『拙者も、同感ぢや。』

といふので、二人が、上月説に從つて判形した。一同、これに倣つて、衆議一決、愈よ籠城といふことになつた。

文右衞門は、丹波に向つて、

『評定は、定つた。貴殿は、妻子を本丸へ入れらるゝか。』

といふ。丹波は、

『無論の事よ。』

と、妻子を本丸へ入れた。他の諸士も、皆我れ先にと、妻子を籠めた。

左右する中、對馬守を始め、城受取の諸將が、迫つて來た。丹波は、吉村又右衞門、水野治郎右衞門の二人を使者として、

『仰せの旨は、謹しんで承はりまする。然りながら、主君お預けのこの城、證據の書狀もなしに渡すことは、人々の存寄も、思ひやられまする。次に、當領國へお入りの儀、田舍の若者共、無禮

の恐れがござりまする。何卒、領國をお避け下されまするやう。』

といひ送つた。受城使側からは、

『左衞門大夫殿は、程遠い。伏見にゐらるゝ備後殿の書翰では如何？』

と曰うて來た。

『父子に相違はござりませぬが、備後守の領國でも城でもござらねば、その言葉は、用ふるに足りませぬ。』

と謝絶した。受城使等は、少からず面喰ひの體であつた。

すると、恰度そこへ、正則の書面が來た。丹波は、城の大手でこれを受け取つた。

『殿のお指圖とあらば、已むを得ぬ。』

といふので、城は、形の如くに明け渡され、一藩の士は、それぞれ、縁故を求めて、廣島を立ち退いた。

時に國除と聞いて、逸早く暇を乞うた者が、三十人程あつた。

これを狹間潜りといつた。妻子を本丸へ入れた者は、諸籠りといひ、妻子を外に置き、單身、城に入つた者は、片籠りといひ、後ち、京都の耳塚に札を建て、三種に分けて、姓名を書き出した。

狹間潜りの面々は、誰れ相手にする者なく、饑死にも及んだといふ。

♡一城に據つて、天下を相手にする。事の成否は、問ふ迄もないが、「仁は勇を

以てせず、義は、力を以てせず。」義の爲めに、失敗を覺悟して、事に當るべき場合もあらう。而も、人間といふ點からいへば、義の爲めの失敗は、その實、成功である。不義の爲めの成功は、その實、失敗である。悲しいかな、打算的なる今の人には、この間の消息が解らない。

藤十郎の所望

＝雲よりも高き處に出でて見よ
　暫しも月に曇りありやと＝

元祿の頃、東の初代市川團十郎に對して、西に、坂田藤十郎があつた。

藤十郎、或る時、一座の女形二三人と、供を連れて、江州石山へ遊びに行き、酒も飲んだ。すると、つひ向ふに、武門の歴々と覺しき人が、近習その他を併せて、上下十二三人で、これも、酒宴をしてゐたが、聲をかけて、

『藤十郎ではないか。酒一つ振る舞ひたい。』

と呼びつけて、盃を與へた。藤十郎は、種々、話などを申し上げ、時を移す程に、日も、西に傾いたので、辭して、元の座へ戻つた。

すると、若侍が來て、

『何なりと、所望があらば申すやう。』

と傳へた。

『何も所望とてはござりませぬ。宜しく仰しやつて下さい。』

『否、それでは、却つて御機嫌が惡い。是非、何なりと……』

と强つての言葉に、

『それなら、お幕の側の松の樹を拜領いたしたうございます。』

と答へ、その儘駕籠で、京都へ歸つた。

程經つて、邸の前に大勢の人聲がする。不審に思つてゐると、人足の采領が入つて來て、

『何時ぞや、石山で約束した松の樹、只今、贈り遣はす。』

との口上である。藤十郎は、思ひ出して、成程、大身の方とは

見受けたが、あの大木を、而も、一山への手續を濟して、贈り越されるとはと、少からず感心し、禮を述べて、采領を返した。

さて、邸内へ運んで、植ゑさせやうとするのに、塀に閊へて、路次口へ入らない。一同、困り果て、がやがや騒いでゐると、藤十郎が聞きつけて、

『さてさて、埒もないことぢや。塀を壞せばよいではないか。跡は、塗つて置けば濟む。』

と叱つた。

あ合せた金子吉右衛門といふ役者は、

『上手の名を得た人の心は、格別ぢや。』

とつくづく感心し、人にも話したとか。

○藤十郎の濶達不拘は、實に、恐れ入つたものである。が、人の行動を邪寃する者は、塀のみではない。第一には利慾、第二には名聞の慾、この二つが、人の行動を妨げ、縱横自在に振舞はせないことは、夥しいものがある。藤十郎がその塀へ壞したやうに、この二慾を切り開いて、いはんと欲する所をいひ、爲さんと欲する所を爲し得るのは、たゞこれ達人の事である。凡人は、到底、拘泥することを免れない。

田子方の氣焔

＝數ならぬ身にはあれども岩清水

清き心に月を宿して―

春秋戰國の時、魏の文侯の師田子方は、清貧、骨鯁の士であつた。文侯の子の擊が、道で出遇つて、車を下りて叩頭をすると、答禮もしないで、その儘行き過ぎやうとした。擊は、立腹して、

『富貴の者が、人に驕るか、貧賤の者が、人に驕るか。』

と問うた。心は、お前は、貧乏學者ではないか。この擊は、諸侯の子である。身分を忘れて、餘り傲慢な眞似をするな、といふのである。子方は、冷然として答へた、

『無論、貧賤の者が驕るのぢや。富者の者は、人に驕ることは出來ぬ。富貴の者が人に驕れば、國君は、その國を失ふ。大夫は、

その家を失ふ。そこへ行くと、貧賤の士は、暢氣なもので、言葉が用ゐられず、行ひが合はなければ、履を納れて去るまでぢや。どこへ行つたとて、貧乏は出來る。』

解つたのか、擊は、この言葉に感心して、拜謝して別れた。

♡「安くに往くとして、貧賤を得ざらんや。」であるから、世に清貧に甘んずる者位ゐ、強い者はない。富貴に心のある者は、或ひは、權門の犬になつて、やたらに尾を掉り、或は、富家の猫になつて、猫撫で聲を出して、阿諛、便佞、至らざる所なくして、尙ほ且つ、御機嫌を損じはしないかと、絶えずびくびくものでゐなければならぬ。

まつ女の至孝

＝無二膏や萬能膏の效目より

親孝行は何につけても＝

若狭の國三方郡豊濱村の農夫九右衛門の妻まつ女は、舅姑に仕へて、至孝の名があり、安永元年五月、領主酒井修理大夫から褒美の米を頂載した上に、生涯、貢を免す旨を達せられた。

その行狀の一二をいふと、當時まつ女は、十七を頭に、二つ迄、六人の子持ちであつたから、家の中の騒がしさは、耳を聾するばかりであつた。けれど、一言も叱らなかつた。人が、その理

由を尋ねると、

『祖父母の身には、子よりも孫が可愛いと申します。その孫を叱つたのでは、舅姑の意に違ひます。ですから、已むを得ない時には、外へ連れ出して、いひ聞かせることにしてをります。』

と答へた。

家は、貧乏であつたけれど、その樣子を舅姑に見せないで、その志を養つた。

姑は、十年前、浮腫を病んで死んだが、その病中は、二便を始め、自ら世話をして、人には手を觸れさせず、衣服、蒲團の汚れたのは、人目を忍んで、そつと濯ぎ、介抱、殘る所がなかつた。

舅は、年八十に餘つたが、若い頃、江戸へ出て、どこかに奉公し、種々、見聞した事を、想ひ回しては、皆に話した。それが、同じ話ばかりであつたので、何れも、聞き飽きてしまひ、誰れ一人、耳を傾ける者がなかつた、けれど、まつ女のみは、

『へゝゝえ、面白かつたでせう。』

などといつて、舅を喜ばせた。

前にいふ通り、貧家の事で、衣服なども、充分ではなかつたので、夜寒の頃は、一重の物も舅に着せ、寢るには、先づ、舅の寢床へ入り、自分の體で暖めた。

實家の父は、彦太夫といつて、相應に暮してゐたので、時々、

食物などを贈らうとしたが、まつ女は、

『否、食ふ物は澤山です。』

といつて、決して受けなかつた。彦太夫は、我が子ながらも感心して、

『私には、子供が七人ある。その中でも、まつは、賢い者で、私でも、恥づかしく思ふことがある。』

といつた。舅も、まつ女の孝行を喜んでは物語つた。これ等の行狀が、廣く世間に聞えて、遂に領主の褒美に預かつたのである。

♡嫁と姑とは、一般に仲が惡い。一般であるから、人は、一向、怪しまないが

抑も、間違つてゐる。この場合、何方が悪い？の論は要らぬ。嫁が悪いに定つてゐる。

黒田の殿様藝

＝私の邪魔物故に自ら直な心も横に出るなり＝

黒田長政が、老臣を相手の宴席で、謠曲を唱へた。一同、口を極めて譽めちぎり、

『まことに面白く承はりました。』

と詠辭を呈した中に、毛利左近は、一膝、乗り出して、

『私も、嘗て謠曲を學びまして、多少の心得はござりまする。けれど、只今の殿のは、甚はだ未熟で、全然、調に合ひませぬ。要するに、殿様藝といふのでござりませう。』

と貶し、一座を見合して、

『君が驕つて、臣が諂ふのは、國家の不祥事でござる。』

と嗜めた。長政は、大に悟り、名刀を與へて、左近の直言を賞し、その後は、再び謠曲を口にしなかつた。

♡學問でも、技藝でも、その他何事でも、人に貶され、冷かされることがあつて、自ら省み、改め、勵ますことがあつて、省み、勵ますことがあつて、進歩もあれば、發達もある。たゞさへ己惚の強い人間、耳に快い詠辭ばかりを聞いて

ぬたのでは、つひ得意になり、小成に安んじて、自ら省みも、勵ましもしない。何として、進歩發達が見られやう？貶さるのは、結構である。冷かされるのは、幸福である。エマルソンは、「非難の聲は、賞讃の聲よりも快し」とさへいつた。富貴の人は、この點に於て、不幸である。彼等に諛辭を呈する者はあつても、貶し、冷かす者はない。從つて、進歩もない、發達もない。彼等の子弟は、概して愚物な所以である。富貴の人は、毛利左近の直言を賞した長政の心がけがなくてはならぬ。

利常の大畧丸

＝世の中は狐狸の化け競べ

誑し誑され誑されて化く＝

加、越、能百萬石の家を保つ爲めに、前田利常は、鼻毛を伸ばして、愚人を裝ひ、幕府の猜疑を免れたといふが、又た、こんな話がある。

何か不快の事があつて、利常は、久しく登城しないでゐた。その後ち、城内で酒井忠勝に出遇ひ、

『久しく拜面致さぬ。御氣隨でも出ましたか』

と問はれると、

『何う致して！　某、老年の爲めか、近來、疝氣が起つて、これ、この通りでござる。』

といつて、前をまくつて、腫れ上つた大睾丸を見せた。一同、大笑ひをしたとか。

♡「すまじきものは宮仕へ。」と淨瑠璃の松王丸はいふが、人に仕へて、百年の苦樂、他人による身は、眞實辛い。堂々たる百萬石の大諸侯を以てして、衆人の前へ大睾丸を出さなければ、その家を保ち得ないとあつては、諸侯たること容易の苦心ではない。寧ろ、市井の町人、田間の百姓の、誰れに遠慮のない氣樂さには如かぬ。官吏となつては、上官の靴臭ひを嗅がなければならぬ。銀行員、會社員となつては、重役、支配人のお髭の塵を拂はなければならぬ。辛い事！　辛い事！

政宗の長脇差

＝苅りて干す門田の稻のむら雀
　求めある身は騷がしきかな＝

伊達政宗は、勇もあり、略もあり、なかなかの傑物であつただけに、豐太閤以來、曲者として目せられた、政宗自身も、それと知つて、充分警戒し、前田利常同樣、勉めて幕府の猜疑を免れやうとした。

こゝに不思議は、その政宗が、寸の伸びた脇差を帶して、登城することである。城内では、一般に、短いのを帶したもの。自然政宗の長脇差が問題になつた。

と知つた政宗は、或る日、故意と脇差を脱して、厠へ行つた。

豫ねて疑問の長脇差とて、一二の諸侯が、そつと拔いて見て、

『これはこれは……』

と一驚した。たゞの木刀であつたのである。

○利常の大畢丸と好一對の笑談柄である。苦心の程が思ひやられる。

老僧木を接ぐ

＝思へ人三世に亘る我れなれば
後の世迄も我が世ならずや＝

三代將軍家光が、或る時、谷中邊りで鷹狩を催し、徒歩で、こ

ゝ彼處を見物した末に、思はず或る眞言寺へ立ち寄られると、最早、八十にも近い老僧が、切りに接木をしてゐた。供が遲れて、側には、たゞ二三人だけついてゐたので、老僧は、そんな大した客人とも知らず、その儘、背ろ向きになつてゐるのを、

『おい、坊主！』

と呼びかけ、

『何をするのぢや？』

と尋ねられた。老僧は、はしたなく、

『接木するのよ。』

と答へた。將軍は、笑ひながら、

『お前の年では、今、接木したとて、その木の大きくなる迄の命が知れぬ。無用ではないか。』

『お前は、誰れぢや？　心ない事をいふ人ぢやな。よく思ふがよい。今、斯うして接いで置けば、後住の代になつて、何れも、大きく育つ。すれば、林も茂り、寺も奥深くなる。愚僧は、寺の爲めを思つてするのぢや。愚僧一代限りの事ではない。』

老僧の言葉に、將軍は、感心して、

『成程、然う聞けば、道理ぢや。』

と頷づかれた。

所へ、供の者が、追々、やつて來た。葵の紋のついた品等も、

多く集まつた。老僧は、初めてそれと知つて、大きに恐縮し、奥へ逃込んだ。將軍は、それを呼び出して、物などを與へられた。

♡金溜め屋に向つて、その理由を質したら、きつと、自分一代の爲なではい。子孫の爲めであると、肩を聳かすであらう。人間として、子孫の爲めを思ふのは、當然の事である。素より然うなくてはならぬ。けれど、子孫に澤山の金を遺すことが、果して子孫の爲めであるか否かといふこと、これも考へなければならぬ。西郷南洲は、「兒孫の爲めに美田を買はず。」といつた。子孫に遺すのは、財産の一小部分に止め、大部分は、國家、公共の事に投じた方が、人間らしい仕方である。たゞこの老僧が、後住の爲めに接木した事などは、その善事たるに於て、些かも異論を挾むの餘地がない。眞に子孫の爲を計る者は、宜し

く彼れの如くに計らないで、此れの如くに計るべきである。

北條時頼の母

＝腐れたるちぎれ草履も錢の端
拾ふ冥加は末に實るぞ＝

鎌倉の執權北條時頼の母、松下禪尼といつた人は、なかなかの賢夫人であつた。或る時、時頼を招くに就いて、煤けた明り障子の破れた所を、禪尼自ら、小刀で切つては張つてゐると、禪尼の兄の秋田城介義景が、接待役に來てゐて、

『承はつて、誰某に張らせませう。そんな事には心得のある者で

すから。』

といつた。けれど禪尼は、

『その男とて、尼の細工には、及びますまい。』

といひながら、手を措かなかつた。乃で義景は、更に、

『全部、張り替へた方が、容易いでせう。それに、斑では見苦しくもあり……』

といつた。禪尼は、

『尼も、後には、すつかり張り替へる心組ぢやが、今日だけは、意と斯うするのです。それには、理由のあることで、他ではないすべて、物は、破れ損じた所を修理して使ふものといふことを、

若い人に見せて、氣をつけさせる爲めです。』

といつたとか。

♡家を治めるにも、國を治めるにも、儉約を第一とする。禪尼の心は、我子時頼に儉約の道を敎へやうとしたので、それも口頭の敎訓では、効果が乏しい。敎育は、自ら模範を示してかゝるのでなければならぬ。さては、自身、破れ障子を張つたのである。親切といつてよい。世間、子を愛せぬ親はないが、身を以て敎へることをしないで、たゞ、叱言をいつてゐる、實効の擧らないわけである。

家康の記念物

＝銅像や記念の石を建てるより
功を立てよそれぞ記念碑＝

關ヶ原役の後、或る日、山岡道阿彌、前羽半入などいふ者が、主人家康の前にゐて、種々、閑話をしながら、

『何か、世に珍らしい事を遊ばし置かれましたら、永く、お名前も殘るでざざりませう。太閤も、大佛を造られました。』

と申し上げた。すると、家康は、

『成程、大佛は、末の世迄も殘り、自然、太閤の名も傳はるであらう。けれど、自分は、一方の事に名を殘さうとは思はぬ。たゞ、天下の爲めになるべき事を工夫して、後嗣に貽すの外はな

い。その方が、大佛を幾つ造るよりも勝つてゐやう。』

といつて、内心、二人の言葉を淺慮として嗤つた。

♡自分を後世に記念すべき物を殘したいと思ふのは、萬人共通の弱點である。立派な墓標、銅像、記念碑、或ひは何かの建築物などを造るのは、皆、この弱點に由來する。到底、執着の爲である。而も、この弱點を脱し得ないとならば、こゝに一つ、最も確かな記念物がある。事業を貽す。事業を墓標とも、銅像とも、記念碑ともする。これに如くはない。その人に、何等、傳ふべき事業がなくて、單に存する銅像などは、世界の邪魔物たるに止まつて、決して後世迄の記念物にはならぬ。

日向守の一言

＝差し出づる鋒先折れよ物毎に
己が心を鐵槌にして＝

寶暦の頃、勘定奉行を勤めた小野日向守は、極めて謹嚴な、而も、機智に富んだ人であつた。或る時、代官に伴はれ、何かの願書を携へて來た商家の手代の文才に感じて、特に引見し、『年輩といひ、文筆といひ、末頼もしい若者ぢや、折角、勉強するがよい。他日、一廉の御用にも立つであらう。』と勵ました。手代は、

『あり難うございます。』

と禮を述べて、代官共々、日向守の前を辭した。

その時、日向守は、玄關迄送つて出て、代官に向つて、

『お代官、この男に御油斷あるな。』

といつた。前には褒めて、後には貶す。手代は、判斷に苦しんだが、後になつて、思ひ當る所があつた。

といふのが、手代は、爾來、勉强した結果、幕府に登庸され、支配勘定と迄出世した。その時の曰くに、

『永い月日の間には、偶ま、善くない心の起ることもあつたが、その際、日向殿のお言葉を思ひ出すと、火に水を濺ぐやうに、惡

心、忽ち消失した。』

とあつた。日向守の一言は、蓋し、後日に備へたのであつた。

○「この男に御油斷あるな」——痛烈極まる言葉であるが、人間は、眞實、油斷がならぬ。但し、他人の事をいふよりも、自分で自分にいふがよい、「この男に御油斷あるな。」と。何人も、內に自ら顧みたら、自分の甚はだ油斷のならない人間であることを發見するであらう。恐ろしとも恐ろし！

阿部家の士某

＝磨き得し心の玉の光もて
冥途の闇を照してぞ行く＝

江戸八丁堀の左ある裏家に住んだ一人の浪人、元と阿部豊後守忠秋の家で、物頭を勤めてゐたのが、仔細あつて、暇を取つたものとか。何一つ生業のない身とて、年を經るに從ひ、次第に貧乏して、果ては、糧も絶え絶えの有様に、家主は、見かねて、稍や久しく、朝夕の物を贈つてやつてゐた。

する中に、浪人は、

『病氣になつた。』

といつて、外へも出なくなつた。家主は、人に持たせて、粥などを贈つた。けれど、

『不食の病ひぢやから……』

と、それを受けず、剰へ、戸を鎖してしまつた。

家主は、毎日、外から聲をかけて、病氣を尋ねた。最初の中は返辭があつたが、後には、何の言葉も聞えなくなつた。

これは不思議と、家主は、近所の者を連れ、戸を破つて、入つて見た。すると、浪人は、具足櫃に寄りかゝり、膝の上に大小を横へ、簀子の上に菰を敷き、その上に坐つた儘、死んでゐた。

傍に一通の遺書があつた。披いて見ると、先づ、年來受けた家主の恩を忘れぬ由を書し、寺への遺はし物、家賃のまだ濟まない分を、この金で取つてくれるやうと、金が添へてあつた。

具足櫃の中には、輝く鎧一領、皆具の儘で、黄金三枚入れてあ

つた。大小の仕立も、古くこそあれ、皆、金拵への儘であつた。

而も、衣服は、身につけた一枚の外にはなく、その他、鍋もなければ釜もない。こゝ百日ばかりの間、食物をしたゝめた樣子が見えなかつた。

所で、この始末は、私には計へない。町奉行へ屆けると、

『その者の、遺書通りに沙汰せよ。』

との事であつた。

舊主人忠秋は、後日、この事を聞くと、

『さては、餓死したか。不便な事ぢや。』

と、哀れがつたとか。

♡この浪人は、多分、失策又は主人に誤解されることがあつて、阿部家を出たのであらう。そして、歸參の命の下るを待つ中に、餓死に及んだものと察せらるゝ。餓死に及ぶ迄、二君に仕へず、生業を求めず、武具大小に手をつけず、用意の金も使はずに、飽く迄、武士的精神を失はなかつた所は、實に見上げたものである。利害によつて、心を動かし、死生の爲めに、志を二つにするのは、聖人の戒しめた所であるが、さて、凡人には難かしい。この浪人は、凡人ではなかつた。

城陸奥守の馬

＝臆病といはるゝ迄に慎しまば
萬づの事に過ちはなし＝

城の陸奥守泰盛は、馬術の名人であつた。馬を引き出させる時足を揃へて、鬪をゆらりと越えるのを見ては、

『これは、勇んだ馬ぢや。』

といつて、鞍を置き替へさせた。又た、足を伸して、鬪に蹴中てる馬は、

『こんなのは、鈍くて過ちがあらう。』

といつて、決して乘らなかつた。

○名人程、用心深い。馬術の事のみではなく、何事につけても然うで、下手な者は、盲滅法に突進して、事を過つ。

彦左衛門の勇

＝思ひいる心はいとゞ張弓の
矢先に向ふまがつびもなし＝

昔し、駿府の城に、うは狐といひ傳へる、不思議な狐がゐた。手拭を與へると、それを冠つて踊る。所が、聲ばかりで、形は見えず、たゞ手拭が空に飜轉して、踊る狀を見せたので、人々、興に入つた。

人が、手拭を與へる時、受け取る形は見えないけれど、手拭を持つた手を、何やら物が磨つて通るやうに覺えて、その儘、取つ

て行く。若い者たちが、故意と渡すまいとして、何んなに固く持つてゐても、必らず取られてしまふので、城中では、大評判をしてゐるのを、大久保彦左衛門が聞いて、

『俺なら、取られはせぬ。』

と、手拭を持つて、

『さあ、これを取らぬか。』

といふと、果して取られない。忽ち空中に聲があつて、

『さてさて、無分別な人よ。怖いこと！　怖いこと！』

といひ、逃げ去つた。彦左衛門は、手に物が觸つたら、手も一緒に切つて落さうと思つてゐた。狐は、それを悟つたのである。

♡人の決心位ゐ恐ろしいものはない。「斷じて行へば、鬼神も、これを避く。」

又た、「神は、決斷を恐る。」とさへいふ。事を成すには、決斷が第一である。

狐疑、逡巡は、成功の大毒物と知るがよい。

左平次誇らず

＝身に負へる科は思はで主と親
誹る人ごそうたてかけれ＝

太陽寺左平次は、長湫の役に、池田勝入齋の手について、戰功があつた。その後ち、天下は、泰平になり、大阪籠城の者さへ、諸侯の國に仕へることを許されたので、嘗て戰功のあつた者は、

それをいひ立てゝ、仕へを求めた。けれど、左平次は、

『大將敗亡の上は、その手についた者として、自分の戰功をいふのは、心得方が違つてゐる。』

いつて、一生、長湫での事を語らなかつた。

♡君臣、主從は、互ひに相待ち、一體となつて、功を奏する。功は、一人の功ではなくて、全體の功である。從つて、罪も全體に於て負はなければならぬ。主人の失敗は、やがて家來の失敗である。主人の失敗した場合に、己れ一人の功をいふ者は、責任の感じがないのである。又た、主從一體の理を認めず、主人は主人、自分は自分と、別々の考へでゐるのである。即はち、主人に對して冷淡なのである。君臣、主從の間のみではない。父子、兄弟、夫婦、一門、朋

友、知己、すべて然うである。氣をつけたがよい。

僧盛親の行狀

＝生きながら死人となりてなり果てゝ
思ひの儘に爲す業ぞよき＝

昔し、京都仁和寺中の眞乘院に、盛親僧都といふ、偉い智者があつた。芋頭——里芋の莖の地中に在る部分をいふ——が好きで隨分よく食つた。談義の座でも、書を讀むにも、大きな鉢に堆く盛り、膝下に置いて、食ひながら談じ、食ひながら讀む。病氣に罹ると、七日、二七日位ゐ、療治といつて引き籠り、よい芋頭

を擇んで、思ひざま多く食つて、癒してしまふ。人には食はせないで、自分一人で食つた。

極めて貧乏であつたが、師の僧の死に際に、錢二百貫と坊一つとを讓られると、坊を百貫に賣つて、都合三萬疋の錢を得た。乃で、それを芋頭の錢と定めて、京都の人に預け置いて、十貫づつ取り寄せ、芋頭を乏しからず食ふ程に、他事には少しも費はないで、三百貫の錢も、皆無になつてしまつた。知らない者は、

『貧しい身に、三百貫の錢を儲けて、そのやうに計はれたのは、まことにあり難い道心者だ。』

と感心した。

或る法師を見て、白瓜といふ綽名を命けた。人が、

『白瓜つて、何ですか。』

と問ふと、

『否、愚僧も知らぬ。若しあつたら、この僧の顏に似てゐるぢやろ。』

と答へた。

盛親は、容貌が立派で、力が强くて、大食で、書道、學問、辯舌、すべて人に優れ、宗門の法燈であつたから、寺中でも、重く思はれたが、何分、世を輕く思つた曲者で、萬事、自由自在に振る舞ひ、人に從ふといふことがなかつた。

例へば、饗膳などに就く時、膳が一同へ行き渡らない中に、自分の前のを、一人で食ひ、歸りたければ、ついと起つて、一人で歸る。常の食事も、人のやうに定めては食はず、食ひたければ、夜半にでも、曉方にでも食ふ。睡ければ、晝でも搔き籠り、何んな大事件があらうとも、その間は、人の言葉を聞き入れない。目が覺めれば、幾夜も寢ず、心を澄して嘯き歩くなど、常の行動、甚はだ尋常とは異なつてゐた。

が、人に嫌はれず、萬事、恕されてゐたといふ。

♡人の生活ぶりが、自分のそれと違ふからといつて、これを奇怪視するのは、誤まつてゐる。取り別け今の人は、自分の現に營みつゝある名利の生活以外、

別に眞の生活のあることを知らなければならぬ。

法然の念佛訓

＝禮といふ文字に泥むこと勿れ

ありべかゝりに背かぬをいふ＝

或る人が、法然上人に向つて、

『お念佛の時、睡氣を催して來て、つひ、行を怠りまする。如何致しましたらば、この障りが除れませうか。』

と尋ねると、上人は、

『目の覺めてゐる間、念佛せられよ。』

と訓へた。

○何事も、出來る限りを骨折つて、それ以上は、放つて置くがよい。それを苦にして、強ひて事をしやうとするのは、無理である。無理は、通らない。無理を通さうとするのは、佛敎でいへば佛の心、儒敎でいへば天の心、基督敎でいへば神の心に背く。

資朝犬の進物

＝若き時學ばぬ悔を嚙み締むる
奥齒なき迄身は老いにけり＝

大和の國伏見の西大寺の靜念上人が、腰は弓、眉は白く、ま

ことに德の高い有樣で、內裏へ參るのを、西園寺公衡が見て、

『あゝ、貴い氣色ぢや！』

と嘆じ、顏に尊信の色さへ見えた。

すると、居合せた日野資朝——これは後ち、北條高時の爲めに佐渡へ流され、首を刎ねられた人。即はち、阿新の父である——は、笑止に思つて、

『あれは、年を老つたのでござる。』

といひ、後日、淺猿しく老いさらぼひ、毛の拔け禿げた尨犬を贈つて、

『この犬、貴く見えまする。』

と嘲つた。資朝は、公家に似ず、氣象の鋭い人であつたと見える。

○老人を貴ぶのはよいが、實をいへば人間の德は、心に在つて、年にはない。論語に、「原壤、夷まつて俟つ。子曰く、幼にして孫弟ならず。長じて述ぶることなし。老いて死なず。これを賊と爲すと。杖を以てその脛を叩つ。」こんな老人では困る。老いて尊敬されやうとならば、若い時に、精々、學問、修養の功を積んで置くがよい。

趙普敬讀の書

＝古への道を聞きても唱へても

我が行ひにせねば甲斐なし＝

宋の名臣趙普は、初め、事務の才を以て聞え、學問には暗かつた。太祖は、それを遺憾に思つて、

『經書を讀むやうに。』

と勸められた。普は、勅旨を畏んで、爾來、大に勉强し、手、卷を釋かず、といふ程の學問好きになつた。

朝廷に、何か大議のある毎に、普は、戸を閉て、自ら一つの筐を開き、一冊の書物を執つて、切りに讀み耽り、さて後ち、出仕した。死んだ時、家人が、その筐を開いて見ると、その書は、論語であつた。論語は、普の最も敬讀した書物で、嘗て太宗に申し

上げた言葉にも、

『臣に一部の論語がございまする。臣は、その半部を以て、太祖を佐けて天下を定め、他の半部を以て、陛下を佐けて太平を致しました。』

とあつた。

♡大なるかな、論語の効用！　以て天下を定むるに足り、以て太平を致すに足る。身を修め、家を齊へる位ゐは、何でもない。伊藤仁齋が、目するに天下第一の書を以てしたわけである。然るに、世間、少しく文字のある者は、皆、論語を讀んで、而も、論語の効用の斯く迄に大なることを認めないのは何故か。思ふに、讀み方が惡いのである。目で讀んで、心で讀まない。心で讀んで、身

で讀まない。己れの經驗に照し合せて、讀み且つ思ひ、思ひ且つ實行する。これでこそ、論語の効用、初めて明白である。

直孝の油斷訓

＝油斷より小事大事になるものぞ
たゞ何事も厚く愼しめ＝

永井信濃守尙政は、執政の職を仰せつけられると、早速、井伊直孝に對面して、

『不肖の身に、斯かる大任を受け、恐懼に堪え申さぬ。御敎訓を得て、任務を全うしたいと存じまする。』

と乞うた。直孝は、頷いて、

『御道理ぢや。では、お敎へ申さう。然し大切な事ぢやから、明朝、身を潔めて來られよ。』

と答へた。尙政は、

『忝なう存じまする。』

といつて、その翌日朝、湯へ入り、禮服を着けて、直孝を訪ねた。

すると、直孝は、座敷へ通して、

『世の諺に、「油斷大斷。」と申すことがござる。定めて御存じであらう。萬事は、油斷の爲めに破れる。この事、固くお忘れあ

るな。』

と敎へたとか。

♡亭々として雲を凌ぐ大樹も、その初めは、たゞ一粒の種である。大事は、すべて、小事から起る。小事は、大事の本である。本があるから、末がある。人間、恐るべきは、末でなくして、本である。大事でなくして、小事である。末なる大事を恐れて、本なる小事を恐れないのは、何うした事か。甚はだ間違つてゐる。双葉の中に拔かないと、後には、斧を用ゐなければならぬ。左右は、油斷大敵と知るがよい。

兼行衆に諭す

＝儚なしや今朝見し人の面影の
立つは畑の夕暮の空＝

何時の年か、五月五日、兼行法師等が、加茂の競馬を見に行くと、車の前に、町人、百姓、大勢の者が立ち塞がつて、見ることが出來ない。一同車を下りて、埒の際へ行つて見たが、こゝも、人で一ぱいで、分け入りやうがないのであつた。

時に、一人の僧があつて、向ふの樗の木に登り、木の股にしやがんで、見物してゐた。取りつきながら、ひどく睡つては、落ちさうになると、目を覺す。それが度々に及んだので、見る者は、

『馬鹿な坊主だ。あんな危い枝の上で、安心して睡つてゐる。』

と嘲り嗤つた。

それが耳へ入ると、兼行は、ふと思ひついた事がある。

『人間は、何時死ぬやら判らぬものぢや。たつた今かも知れぬ。それを忘れて、物を見て日を暮す愚かさは、あの法師以上であらうよ。』

といふと、前にゐる人たちは、

『眞實です。人間は、馬鹿なものです。』

といひながら、後ろの兼行たちを見返つて、

『こゝへお入りなさい。』

と、場處を讓つた。兼行たちは、お蔭で、樂に見物することが

出來た。

○人が、我意、我欲を主張し、一歩と雖も、人に讓ることをしないのは、我が死の寸刻の後に在ることを知らず、却つて、百年も千年も生き延びる心組でゐるからである。而も、その危さは、木の股に坐睡るよりも甚はだしい。死ぬことを思へ！　死の寸刻の後に在ることを思へ！

武田信玄の弟

＝世の中に何はあれども同胞の親しきばかり樂しさはなし＝

武田信玄の父信虎は、平生、謫子たる信玄を廢して、その弟

信繁に家を繼がせる心組でゐた。それが爲めに、信玄父子の間が不義になつてゐたが、群臣、何れも、信玄の武略に長じてゐるのを見て、これに思ひついたので、信玄は、父信虎を逐ひ、自ら甲斐の主となつた。信虎は、駿河の今川氏に賴つて、幾年を過し、更に京都に流落して、一代を終つた。

自然、信玄は、弟信繁に對して、よい感情を持つてゐなかつたに相違はない。然るに、兄弟の間、曾て違言のあつたことはなく、父を逐つた程の信玄ながら、信繁に信任して、少しも猜疑の心なく、終始一貫、これと親睦した。

といふのが、信繁の心がけが善かつたのである。父信虎の考へ

は左に右、信繁に在つては、少しも兄を凌ぐの心はなく、弟と
しては、これに敬愛を捧げ、臣としては、これに忠節を盡し、我
が子に敎へて、「縱ひ、海は野となり、野は山となるとも、盡未來
際、御館に對して、二心あるべからず。」と迄いつた。そして、そ
の身は、信玄の爲めに、川中島で戰死した。如何な信玄も、この
弟を信せずにはゐられなかつたのである。
♡孟子曰く、「仁者に敵なし。」と。即はちこの謂である。

豊州鶉を放つ

＝心して渡れ人々世の中は
金の罠やら色の罠やら＝

萬治、寛文の頃、鶉が流行つて、高貴の家では、互ひによい鶉
を飼つた。自然、値段も、頻りに騰貴した。
老中阿部豊後守忠秋も、鶉好きの一人で、常に籠を側に置き、
鳴き聲を樂しんだ。或る諸侯が、それを聞いて、その頃、世に隱
れのない鶉を、大金で買ひ取り、典醫の某を以て、
「この程、珍らしい鶉を求めました。お慰みに、進上いたした
い。」
といはせた。悅ぶと思ひの外、

『先へよく心得て……』

とばかり、左右の返辭がない。

不思議に思つてゐると、豐後守はやがて、近習の者を呼んで、

『鶉籠の口を、全部、庭の方へ向けよ。』

と命じ、次に、

『殘らず籠の口を開けよ。』

と命じた。鶉は、先を爭つて、籠を飛び出し、殘る所、一羽もなくなつた。

典醫は、益す不思議である。

『お手馴れた鳥で、復た歸つて來るのでござりまするか。』

と問ふと、豐後守は、

『否、然うではない。今日限り、放してやつたのぢや。さて、序でながらいふが、自分のやうに、上の御威光によつて、人に執し思はれる身では、物好みはするものではない。自分が、この頃、ふと鶉を好くと、最早、そんなことをいふ人もある。今後は、きつと鶉好きを止める。』

この言葉に、典醫は、手持ちなく歸つたとか。

♡人の好む所は、その人の罠である。うつかりすると、その罠にかゝつて、身をさへ滅す。氣をつけなければならぬ。

佐久間の顛倒

＝男の子我れ我れは學ばん一筋に
命を捨つる武夫の道＝

蒲生家に簑仕し、初めて主人氏郷に謁した佐久間久右衞門安次、何うしたことか、疊の縁に躓いて倒れた、隨分無作法なわけで、近習たちは、顔見合せて、笑ひを忍んだ。氏郷は、それと知つて、

『これッ！　久右衞門は、疊の上の奉公人ではないぞ。』

と叱りつけた。

♡無作法ではある。けれど、儀式、作法を知らない位ゐは、丈夫たるに於て、何等、差閊はない。丈夫、須らく丈夫的の修養を積むべきである。

律師鏡に恥づ

＝善惡の人を見る目は持ちながら
我が身の上は烏羽玉の闇＝

高倉帝の時、法華堂の三昧僧某の律師は、或る時、鏡を執り自分の顔をつくづくと見て、その醜く淺猿しい事を餘りに心憂く思つて、鏡さへ疎ましい心地がしたので、爾來永く鏡を恐れて、手にも執らず、又た、人に交はることもなく、御堂の勤めの時にのみ逢つて、平素は、引き籠つてのみゐたとか。

○これに就いて、兼好法師は「賢げなる人も、人の上をのみ度りて、己れをば知らざるなり。我れを知らずして、外を知るといふ理り、あるべからず。然れば、己れを知るを、物を知れる人といふべし。容貌醜けれども知らず。心の愚かなるを知らず。藝の拙きをも知らず。身の數ならぬをも知らず。年の老いぬるをも知らず。病ひの侵すをも知らず。死の近きことをも知らず。行ふ道の至らざるをも知らず。身の上の死を知られば、況して外の譏りを知らず。」といつてゐる。中に就いて、容貌の醜いことは、鏡を見て知れる。年の老いたことは指を折つて知れる。知れ難いのは、藝の拙いことである。己惚があるからである。身の數ならぬことである。身上が鼻にかゝるからである。病ひの侵すことである。强健を恃むからである。死の近いことである。當眼の嗜欲に耽けてゐるからである。行ふ道の至らぬことである。てんで道といふものを知らないか

らである。思はなければならぬ。

忠籌阿諛せず

||習はじな葦間の蟹の横にのみ
行かば行かるゝ道はありとも||

何時の頃からか、江戸城内では、新たに若年寄などの重職に就いた者から、大奥の老女へ、紅白の縮緬、金銀を贈るの弊習が行はれた。大奥の老女は、非常に威勢張つたもので、これに金品を贈つたのは、名は、披露の印とでもいつたのであらうが、實は、賄賂に外ならなかつた。男が女に賄賂を贈る——妙なわけではあ

るが、多年の習慣、誰れもそれを怪しまなかつた。

所が、本多忠籌が若年寄になると、

『自分は、小祿ぢや。それに、近來、頻りに凶作が續いたので、そんな贈り物をする餘裕がない。且つ、今度の事は、望み乞うての御任命ではない。贈り物の先例に違つて、爲めに怒りに觸れ、職を褫がれるやうな破滅になつたとて、少しも恥辱とは思はぬ。旁た、そんな贈り物はせぬ。』

といつて、斷然、贈賄しなかつた。

♡賄賂を贈つたり、取つたりすることの曲事たることは、いふ迄もないが、今の世には、屬ば、これが行はれて、法廷を煩はし、新聞の三面種を蒔く官、公

吏が少くない。國家の爲めに、風敎の爲めに、實に、痛嘆の至りである。この非違が、頻々と行はれる間には、一つの習慣ともなる。習慣となれば、世人一般、これを不思議とも何とも思はない。又た、偶々、淸廉の士があつても、その習慣を打破することは難かしい。その結果は、何うなるか。

矢田の金鯉兜

＝人も亦たきつと二つの眼のあれば
　　鷺を鴉と見違へはせじ＝

赤穗義士の一人矢田五郎右衞門の先祖矢田作十郎は、元龜、天正の頃、德川家康に仕へ、三河武士の中でも、特に剛勇の名があ

つた。石瀬の役に、敵の首と併せて、その金鯉の兜を奪ひ取り、爾來、戰ふ毎に、それを冠つて出た。敵は、一見、

『それ、金鯉が現はれたぞ。』

といつて、怯ぢ懼れる位ゐで、矢田の金鯉の兜の名は、一時、敵味方の間に鳴り響いた。

作十郎の同僚に、阿部四郎五郎といふがあつた。これ亦た、餘程の剛の者であつたが、或る日、作十郎を訪ねて來て、

『拙者も、貴殿にあやかりたい。就いては、一度、金鯉の兜を貸しては下さらぬか。次の軍には、冠つて出るから。』

と請うた。作十郎は、苦り切つて、

『貸しもしやう、けれど、貴殿のやうな卑怯者には、恐らく似合ふまい。』

と、ひどい挨拶をした。四郎五郎は、怫然として、

『何、卑怯ぢやと？　その理由聞かう。』

返辭によつて、血闘でもしさうな權幕である。

けれど、作十郎は、一向、平氣なもので、

『確かに卑怯ぢや。』

『何が卑怯ぢや？』

『拙者は、戰場へ出る毎に、死を決して出る。然うあるべきで、生還を期して出る者があつたら、それは、必らず卑怯者ぢや。貴

殿は、今、あの兜を貸せといはるゝ。生きて還つて、返す心があるのであらう。卽はち、卑怯ではないか。何故、くれよといはれぬか。』

所謂る卑怯の意味を、斯くと說明した。

理の當然に、四郎五郎は、怒りを收めて、改めて金鯉の兜を讓り受けた。

そして、その後の戰ひには、何時も、それを冠つて出たが、兜は同じ兜ながら、主が違ふ、人が違ふ。最初の中は、敵を恐れさせたが、時の經つに連れて、却つてその侮りを受けるやうになつた。金鯉の兜も、斯なつては、最早、夕、譽の物でも何でもない。

四郎五郎も、詰らなく感じたのか、後ち、作十郎へ返却に及んだ。作十郎は、

『鯉は死んだ。』

とばかり、再び冠らうとはしなかつた。

♡「羊頭を懸けて、狗肉を售る。」の譬へもある。看板には、僞りが多い。決してあてになつたものではない。

白石の義俠心

＝身を削り人をば救ふ摺子木の
この味知れる人ぞ少き＝

新井白石は、困窮、その極に達し、往々、米鹽にも事を缺かうとする間に苦學して、而も、才學を兼ね備へ、木下順菴の門に在つて、該博を以て稱せられた。こゝに於て、順菴は、白石を自分の嘗て仕へた加賀の前田侯へ推薦しやうと、その意を白石に通じた。

白石の同門に、加賀の人、岡島仲通、名は達、石梁と號するがあつた。或る日、白石に向つて、

『私が、江戸へ學問に來てゐるのも、最早、何年かになる。この頃、故郷の母からの手紙に據ると、母も、日一日と老衰して、私の歸るのを、頸を長くして待つてゐる樣子ぢや。それを思ふと、

萬感、胸に迫り、殆んど斷腸の思がある。就いては、先生の御推薦を乞うて、前田家へ仕へたいと思ふ。貴方から、先生へこの事を願つてはくれませんか。』

といふ樣子が、餘程、困つてゐるらしかつた。

白石は、非常に同情して、早速、順菴の許へ生つて、詳細、岡島の願意を述べ、

『私は、どこと國を擇びませぬ。岡島の爲めには、老母のをらるゝ國で、加賀へ往きたいのも、道理でござりまする。何卒、私を措いて、岡島を御推薦下されたく、私からも、切にお願ひ申しまする。』

と乞うた。

順菴は、少からず感心して、

『人の心が、日に浮薄になつて來てゐる今の世の中に、子のやうなことをいふ者は、決してありはせぬ。古人を今に見るとは、これ等をいふのであらう。』

といつて、白石の友に敦いことを賞め、感涙を禁じ得なかつた。

岡島は、やがて、加賀へ行くことになつた。

○白石のこの一擧、實に希有である。樂にでも暮してゐることか、貧苦徹骨の境遇に在つて、折角、廻つて來やうとする幸福を、他人に讓るなどは、常人には、到底々々である。が、「情けは、人の爲めならず。」である。元祿の六年になると、白石は、甲府侯綱豊へ推薦された。綱豊は、後ちの六代將軍家宣である。白石が充分、その手腕を揮つて、一代の大人物となり得たのは、家宣に重用されたからである。若し、岡島の情ひを斥けて、自身、加賀侯に仕へたならば、何等、聞ゆる所なくして終つたも知れぬ。白石は、小なる幸運を友に讓つたればこそ、大なる幸運に與かることが出來た。果然、情けは、人の爲ではない。

結解某の高義

＝斯かる時さこそ命の惜しからめ
豫ねてなき身と思ひ知らずば＝

寛永、正保の頃でもあつたか、江戸芝の天徳寺境内の脇寺に、常念佛といつて、絶えず念佛を唱へる寺があつた。或る日の夕暮に、その寺の住僧が、外へ出かけると、桐油包みを頸にかけた、上品らしい人が、門前に佇んでゐた。稍や久しく外にゐて、歸つて來ると、やはり、佇んでゐるので、不思議に思ひながら、

『何方ですか。此方へ入つて、お休みなさい。』

と、言葉をかけた。その人は、

『念佛の聲が、まことに殊勝に思はれますので、最前から、こゝに時を移してをります。それでは、お茶一つ、頂戴いたしませう。』

と、内へ入つた。

住僧は、茶を侑めて、

『どこからお出でなすつた？　して、何方へお越しですか。』

『手前は、奥州から來た者でございます。江戸に昔し知り合つた者がありますので、遙々、尋ねて來ましたけれど、久しい事で、その人の行方も、今では判りません。これから、どこへなり身を寄せたいと思つてをります。』

との言葉に、住僧は、頷づいて、

『最早、日も暮れました。今晩は、こゝでお寢みなさいまし。』

といつて、一宿させ、翌日になると、

『落つかれる先も、まだ定つてゐないやうに承はりました。それの定る迄、何日でも、お宿しませう。ゆつくり、寺に御逗留なさるが宜しい。』

と勸めた。その人は、

『あり難うございます。』

といつて、その儘、そこに留まつた。

さて、何くれと話をして見ると、古い事などを覺えてゐて、たゞ人とは見えない。

すると、天德寺の和尙が聞いて、後には、本坊へ招き、懇ろに扶持して置いて、寺中の事を任せた。所が、萬事、殘る所なくよ

く取り捌き、衆僧の締りにもなつたので、大切な人として、一同貴び合つた。

その頃、某諸侯の隱居が、年が長け、古い事を記臆へてゐて、伽になる人があつたら、俸祿も手厚く當てがひ、國賓のあしらひで召し抱へやうと、尋ね求めてゐた。それを聞いた天德寺の檀越某が、

『それなら、あの人に限る。』

といつて、早速、知らせに來た。

所が、その人は、

『手前、奉公の望みはございません。今迄は、申さずにをりまし

たが、斯やうに御懇意の上は、何を隠しませう。』

と、こゝに初めて、本名を名乗つた。寺では、何か他の名をいつてゐたのである。

『手前、まことは、蒲生氏郷の家來で結解と申します。蒲生の家が亡びて後は、他家に仕へる心はなく、縱ひ乞食になる迄も、行き倒れる迄もと、覺悟してをりましたが、存じも寄らず寺の御恩になりました。今は、この御恩も報じかねます。』

悄然として斯ういつて、九戸合戰その他で、氏郷から與へられた感狀、諸侯からの招きの書狀を取り出して、座中の者に見せ、

『最早、これも、無用になりました。』

といつて、火に燒き捨てゝしまつた。

斯くて、幾年かを經る程に、明暦の大火で、天德寺も、類燒した。結解は、

『手前にお任せ下さい。』

といつて、和尙、衆僧を立ち退かせ、たゞ一人、駈け廻つ、佛像、經文、その他諸道具、一つも殘さず他へ運はせ、

『最早、思ひ殘す事もない。お前たちも、早く退けよ。』

と、僕等をも立ち退かせた。

火が燒け通つて後ち、堂間の燒跡に、手を拱き、結跏趺坐して焚け死んでゐる者がある。見ると結解であつた。寺中の上下は、

涙を流して、惜しみ合つた。

曾て一面識のない旅人を呼び入れ、泊らせ、更に、永く逗留させるなどは、當時にあつて、今日にない事である。結解が、二君に仕へなかつたのは、忠臣の至情である。最後の焚死は、この世に望みのない自分、機會があつたら、功を立てゝ、住僧等の恩に報い、それを境ひに、死んで除けやうと、夙に然う思つてゐたのであらう。この話し、情あり、義あり、逸話の上乘なるものとしてよい。

『比喩篇』

これは近道だ

＝急がずば濡れざらましを旅人の
後より霽るゝ野路のむら雨＝

『嘘でも可い。策略も必要だ。左に右、怜悧に近道を立ち廻つて、早く成功しなきならない。』

と、そんな考へで日を送る或る男、或る時、一人旅をして、廣

い野原を通りかゝると、急に便通を催して來た。乃で、路傍の野雪隱へ駈け込んだが、さて、氣が揉める。

『こんなことに時間を費すのは詰らない。大分、道を損するわけだ。あゝ、何とか便法はないか知ら？　近道はないか知ら？』

と思案の末、忽ち一計を考へ出した。

『かうしてゐる中に、辨當をしてやらう。』

といふのである。

『成程、それが可い。』

と、懷中から皮包みの握飯を取り出す途端、山蜂の大きなのが飛んで來て、大事のところをちくりと螫した。これはとびつくり、

思はず握飯を取り落して、じつと下を覗いてゐたが、丁と横手を打つて、

『はゝあ、これは、近道だ。』

口へも入れず、喉も通さず、胃へも、腸へも送らないで、手から直ぐに落してしまふ。成程、これは、近道である。然し、その握飯、體の滋養にはならぬ。近道の恃みにならないことは、大抵こんなものである。

小僧の大失敗

偽りの心を捨てゝ渡る世は
身に恥もなし恐れみもなし

『おい、長松、この九年母を品川へ持つて行け。』
『はいはい。』
と威勢よく出かけたが、つひこの頃、田舎から出て來たばかりで、これ迄、九年母といふものを見たことがない。
『何だらう？　九年母つて、聞かない名だが……』
と首を傾げながら、そつと籠の蓋を除つて見ると、旨さうな果物が入つてゐる。數へて見ると、正に九つ。
『はゝあ、九つだから九年母か。可し、可し。』
と早合點して、忽ち一つを袂へ忍ばせ、先方へ行つて、
『御免なさい。』

『はいはい。』
『私は、芝の伊勢屋から參りました。ほんの一つでございますが、この八年母をお目にかけます。』
とやると、取次の女中がびつくりして、
『お前さん、何をいふのさ？　九年母ぢやないか。』
長松は、早くも惡事が露はれたかと、眞つ赤な顏をして、
『實は、一年母を隱しましたので……』
きまり惡げに、袂の一つを取り出した。
♡隱してすることには、左右、無理がある。無理があるから、顯はれ易い。拙隱しに隱して、何、大丈夫だ、知れやしない、と思つてゐるのは、この長松の

愚に似てゐる。世間の怜悧者は、この點、特に注意を要する。

慌て者の手紙

＝急ぐともたゞ手足をば急ぐべし
心はじつと落ちつけてせよ＝

慌て者が友人へ手紙を書いた。その文句に、「先刻は、お邪魔いたし候。その節、お宅の玄關へステッキを遺れ置き候に就き、お手數ながら、お取調べの上、この者へお渡し下され度、右願ひ上げ候。」と書いて、封をしやうとすると、細君が來て、

『貴方、杖はあるぢやありませんか。』

『どこに？』

『これでせう？』

『それだ、それだ。』

といひながら、右の手紙の追て書きに、「前記のステッキ、只今發見いたし候間、もはや、お調べには及び申さす候。」と書き足して、

『おい、これを持たせてやりな。』

♡事を急にしやうとして、よくも考へず、鼻先思案で手を下せば、手落もあり、無駄もあり、結句、仕損じて、二重、三重に手がかゝる。諺に、「急がば廻れ」といふ。又た、「武夫の矢走の渡し近くとも、急がば廻れ瀬多の長橋」といふ古

歌もある。急ぐ時には、却って、心を落ちつける工夫が肝要である。といつて、糞落つきに落ちつくのも宜しくない。機會は、忽ち來つて、忽ち去る。落ちつき過ぎると、機會を失してしまふ。何事も、中庸を得る事が必要である。

飛んだ孝行者

＝祈りても驗なきこそ驗なれ
祈る心に誠なければ＝

孝子父子は、永の病氣、元來、貧しい身の上とて、既に饑死にも及ばうとした時、或る日、隱りの鷄が、土の塊りを咥へて來た。碎いて見ると、金貨や銀貨、入つてゐる。これは不思議と、驚い

てゐると、その翌日も、又たその翌日も、毎日、金を運ぶ。父子は、その金で藥を買ひ、病氣が癒ると、殘金を資本に商賣して、遂には、非常な大商人となつた。この話を耳にした不孝者、早速鷄を二三十羽買つて來て、

『阿母あ、俺も、今日から孝行をするよ。肩を揉んでやらう。何、肩は凝らないつて？　何でもいゝから、脊中を出すんだ。肌をお脱ぎよ。寒い？　我慢するさ。何、痛いつて？　然うさ、俺は、力があるから、少しは痛いよ。』

と、親を叱りながら、肩を揉む。そして、鷄が裏へ行くと、酒を飲んで寢そべつてゐる。こんなことを十日も續けると、或る日

鶏が、大きな土の塊りを咥へて來た。やれ嬉しやと、碎いて見ると、中から出たのは太い蚯蚓！

『えゝ、何程、不景氣な世の中でも、この態は何だ。』

と怒ると、鶏、大きな口を開いて、

『べつかつこう！』

♡心のない善行に、何の利益があるものか。孝行のみの事ではない。すべての善行、すべて然りである。

形見の馬の尾

偽はりの衣を着ずに人はたゞ

ありの儘なる裸こそ善き

或る男、黒馬に乘つて戰場へ出たが、元來、大の臆病者で、敵と戰ふなどは思ひも寄らぬ。故意と戰死者の血で顏を汚し、草の中に打つ倒れて、死んだ眞似をしてゐる中に、敵の爲めに馬を奪ひ去られたが、それでも、命は助かつた。戰爭終つて、怖わ怖わ起き出し、側に斃れた白馬の尾を截り取つて、意氣揚々、味方の陣へ引き返し、口から出任せの功名話し！

『して、貴公の馬は？』

と一人が尋ねると、

『さればでござる。亂軍の中に射すくめられ、無殘の最期を遂げ

たに就いて、畜生とは申せ、屢々、戰場に伴うたる彼、不憫に存じ、形見にもと、これこの通り、彼れの尾を截つて、持ち歸つてござる。』

と答へると、相手も然るもの、

『然し、貴公の馬は黒馬の筈。その尾の白いは、如何なこと？』

との反問に、臆病者、ぐつと詰つて、

『それは、その、實は、その……』

♡嘘や胡麻化しが、何になるものではない。正直、これ、最良の方便である。貧富、窮達、智愚、勇怯、ありの儘なのをよしとする。拙な空威張りをして、尻尾の色を間違へないやう、否さ、尻尾を出さないやうにしたい。

裾についた火

＝急ぐとも急ぎ過ぐるな緩くとも緩きに過ぎて悔ゐを殘すな＝

冬の寒い日、名詮自稱、緩くり者の緩吉と性急家の急太とが、圍爐裏の側に胡坐をかいて、世間話をしてゐると、急太の着物の裾へ火がついて、次第に燃えて行く。急太は、話に夢中で、それと氣づかない。緩吉は、疾くに認めて、

『時に、君、僕は、君に知らせてやりたいことがあつて、先刻から、いはうか、いふまいかと、實は、考へてゐるんだよ。』

と相手の顔を見る。

遠慮は無用、いひ給へ！』

『だつて、君、怒るだらう？』

『否、怒らない。』

『必とかい？』

『必とだ。』

『然しねえ……』

と躊躇すると、急太は、益々せき込んで、

『何故、いはないのだ？　早くいつて呉れ給へ！』

『ぢや、いはう。實はね、君の着物の裾に火がついて、それ、そ

の通りに燃えてるんだよ。』

急太はびつくり、急ぎ、その火を揉み消して、

『何故、早くいはないんだ。』

と怒鳴つて、緩吉の頭をぽかり。緩吉は、一向、落ちついたもので、

『だから、君は、性急家だつていふんだよ。』

♡緩くりは可い。然し、事にもよる。場合にもよる。又た、程度もある。

山賊の大失敗

＝偽はりの大風呂敷を擴げても

包むに餘る事の大さ＝

昔し、一人の山賊があつた。或る時、國王の寶藏へ忍び入つて、立派なお服を盜み取り、雲を霞と逃げ失せたが、天の網は、滅多に洩さず、忽ち役人に捕まつて、王の御前へ引き出された。王は、徐かに口を開いて、

『其方は、その服をどこで手に入れたか。』

と問ひかけられた。

『はい、これは、先祖傳來の品でござりまする。』

『嘘をいへ。』

『何の、嘘を申しませう。嘘れの場所へは、これ迄も、時々、着

て出ました位ゐで……』

『然うか。それならば、今、予の前で着て見よ。』

とのお言葉。乃で山賊は、早速、着にかゝつたが、何分、國王のお服であるから、普通のと作り方が違ふ。手に纏ふべきものを足に纏つたり、腰に着けるべきものを頭に着けたり、大間誤つきに間誤つて、到頭、尻尾を出してしまつた。王は、大喝一聲、

『こゝな曲者め。それッ、役人共、此奴を牢へ入れてしまへ！』

♡惡事を働いて、强情や胡麻化しの風呂敷に包み込まうとしても、惡事は、常に風呂敷より大きい。決して包み切れはせぬ。胡麻化しばいふ、拙な手段を特みにして、世を渡らうとする間違ひは、才子、怜悧者に得てある例ひ、注

意、これ、肝腎である。

飢ゑた團子賣

＝古への道を聞きても唱へても
我が行ひにせねば效なし＝

七月の炎天、燒けつくやうな町中を、

『團子よう團子、團子は如何？　團子よう……』

と呼び歩くその聲が、如何にも苦しさうである。

『團子屋さん、お前、何處か惡いの？　お腹が痛いのだらう？』

と訊くと、

『否、何處も惡くはありませんよ。』

といふ。

『だつて、大層、苦しさうぢやないか。何故、威勢よく呼ばないのだ？』

『はゝゝ。實は、今朝から、物を喰はないので、お腹がすつかり空きましたのさ。』

『それなら、お前のその團子を喰へば可いのに。』

『所が、全部、腐つてるのでね。』

と、團子賣りは、平氣な顏！

♡自分にも食ふに堪えない腐つた團子を、人に賣りつけやうとする橫着者、さ

てさて、驚いたものである。然し、不正直を常とする商人には、この傳が多いと聞く。否、商人のみではない。一知半解、ちんぷんかんぷん、よくは呑み込めないでゐる學問を、先生顔して、人に賣りつける似而非學者、天蓋、般若湯に腸を腐らせ、「佛ほつとけ。」でゐる癖に、道心堅固を裝つて、經を賣りつける末世の坊主、皆な、そのお仲間ではあるまいか。胡麻化し澤山の世の中、用心が肝腎々々！

消えたる提灯

＝春の花秋の紅葉もなかるべし
盲滅法怒鳴り散らせば＝

夜に入つて、

『然やうなら。』

と歸りかける按摩を呼び留めて、

『夜道は危ない。提灯をお持ちなさい。』

と主人がいふと、

『御戯言を！　盲人に提灯が要りますものか。ばゝゝゝ。』

按摩は、調戯はれた氣である。

『否々、お前は、闇を恐れないが、行き逢ふ人が衝突かつて、結句、險呑だ。』

『成程々々、私は、大丈夫ですが、得て、目明きが突き當ります。では、お借りして參りませう。』

と、提灯片手に、高足駄からころ、約そ五六町も行くと、ばつたり、衝突かつた者がある。按摩は、大きに立腹して、

『危いッ、氣をつけろい。』

と怒鳴る。相手も、負けてはゐない。

『其方で氣をつけろい、どう盲人め！』

『然ういふ貴樣が盲人だらう。目明なら、俺に突き當るわけがない。この提灯が見えないかッ。』

と、按摩がずつと差し出した提灯は、疾くの昔し、火が消えてゐた。

♡火の消えた提灯を、明るい心得で、相手を怒る按摩殿、良心の癪痺した

頭、間違ひだらけの考へを固執して、人を怨み、人を腹立つ没分曉漢、その哀れさに變りはあるまい。心の提灯を消さないやう、大に用心すべきである。

水の底の黄金

＝橋なうて雲の上へは登るとも
俺が俺がは恃まれもせず＝

或る男、池の畔りを通ると、水の底に、きらきら、黄金が光つてゐる。慾には寒さも打ち忘れ、眞つ裸になつて、飛び込みざま、泥の中を搔き廻したが、黄金どころか、古釘一本も出て來ない。がつかりして、這ひ出したが、水が澄むと、復た、黄金がきらき

ら光る。見捨てかねて、再び、飛び込んで、探して見たが、何等得る所がない。殘念ながら、今はと思ひ諦らめて、ぼんやり、突つ立つてゐると、そこへ父が尋ねて來て、

『おいおい、何してるんだ？　この寒さに、水泳ぎでもあるまい。どうした？』

といふと、

『いや、水の底に黄金が光つてるからね。』

『どれどこに？』

『それそこに。』

と指ざすのを、父は、つくづくと見て、

『何をいふんだ。あれは、空の月が、水に映つてゐるのぢやないか。』

と大笑ひをしたといふ。

♡論語に、「子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし。」とあつて、人は、元來、無我のものである。俗人が、ない我れをありとして、やたら、俺が俺を揮り廻すのは、水底に黄金を探るこの愚人と何れ？

何が出來た？

＝雞を割くには惜しき牛刀
何の爲めとて君は學びし＝

或る男、約そ一抱えもあらうといふ大きな石を、山から採つて來て、今日も、明日も、せつせと磨く。

『何うするのか。』

と尋ねると、

『少し考へがあつてね。』

と、仔細ありげにいこりする。二三年も磨き續けたのを見ると、石は、大分小さくなつたやうだが、側の目には、さつぱり了簡が解らない。

『ねえ、君、何うする心組？』

と重ねて尋ねても、

『少し考へがあつてね。』

と、前の言葉を繰り返すばかり。

『解らないねえ。』

『まあ、默つて見てゝ呉れよ。細工は流々、仕上げを御覽じだ。』

と笑つて、磨き續けること七年、漸と出來上つたのを見ると、何の事、多くの年月、多くの勞力を費して、小ぽけな玩具の牛！

○これを稱して、馬鹿働き、馬鹿骨を折るといふ。所謂る、一勞して功なし。に近い。多年の學問、多年の勉強、それで何事が出來たかといへば、巧く行つて、十萬、二十萬の財產、大きな家に、美衣と美食！　人間には、もつと立派な仕事があるではないか。そんな事が大成功か。拙に石を磨がないやう、大に用心すべきである。

法螺の吹損ひ

＝法螺吹きのさつてもさても吹いたりな
　我れも我が身も吹き飛はす迄＝

左右、法螺を吹きたがる男、大勢の集つた席上で、誰は、品行がいゝの、某は惡いのと、人の批評が始まると、

『いや、品行の點に於ては、天下、廣しと雖も、俺に及ぶ者はあるまい。この年になる迄、女に接したことがないからね。』

と大法螺を吹き立てる。

『女房でもかい？』

『勿論！　女房は、家の炊事係りに過ぎぬのだ。』

と臂を張る。一同、

『ふゝッ。』

と噴き出して、

『君には、子供が三四人あるね？　あれは、何うしたわけなのだい？』

と詰ると、

『うむ、あれか。あれはね……あれは……』

と言葉が出ない。

『あれは、何うなのだ。』

『さあ、あれは、多分、誰か他所の男が產ませたのだらうよ。』

と苦しい返答。一同は、呆れ返つて、

『すると、君の女房は、飛んだ淫奔女なのだね？』

♡これは、法螺の吹き損ひ、自分を偉くしやうとして、却つて馬鹿になつたのである。法螺吹きには、往々こんな失敗がある。それにしても、女房に汚名を負はせて迄、法螺が吹きたいとは！

利き過ぎた鹽

＝程といふこの一文字を忘れずば
世に過ちのなどかあるべき＝

間抜けな三太郎、一日、他へ招かれて、御馳走になつた。椀の物も、皿の物も、水臭くて、旨くとも何ともない。不平らしい樣子でゐると、主人は、早くもそれと察して、ぽつちり、鹽を入れた。味が忽ち一變して、それこそ、頰べたが千切れさうである。乃で、三太郎は考へた。

『あれんばかり、鹽を入れてさへ、こんなに旨くなるんだもの、鹽ばかり食べたら、何んなに旨いことだらう。』

と、そこそこに暇乞ひして、家へ歸ると、納屋の俵から、鹽を大きく兩手に掴んで、むしやり、むしやり。些とも旨くないのみか、ひどく口や舌を損ひ、腸胃の病氣を引き起して、醫者よ、藥

よと、大騒ぎをやらかしたといふ。

♡物には、程度がある。「過ぎたるは、猶ほ、及ばざるが如し。」で、程度を過すと、是も非となり、善も惡となり、利も害となり、得も失となる。小早川隆景の壁書にいふ、「面白の春雨や、花を散さぬ程。面白の儒學や、武備の廢らぬ程。面白の武道や、文學を忘れぬ程。面白の酒宴や、本心を失はぬ程。面白の利慾や、理義の塞がらぬ程。」と。何事にも、この程を失はぬやう、左右、用心しなければならぬ。

一足飛の成人

＝年を經て辿らん道の果てにのみ
寶の山もあらばあるべし＝

王女がお生れになつた。王様は、お附きの醫者を召んで、

『王女に藥を與へて、立地に成人させて呉れ。褒美は、お前の望み次第。』

との仰せ。醫者もさる者、

『畏まりました。』

とお請けして、

『就きましては、只今、手元に藥がございませんから、暫時、お暇を頂いて、それを求めて參ります。それ迄は、王女様を御覽下さらぬやう、固くお斷りして置きます。』

と申し上げ、その儘、御殿を辭して、旅に出た。斯くて十六七

年も經つと、ひよつこり、歸つて來て、王女に譯の分らない藥を服ませ、王樣の前へ連れて出て、

『只今、お藥を差し上げましたら、この通り、御成人でございます。』

王樣が見られると、成程、前に赤ん坊で在られた玉女は、今や娘盛りの輝くばかりの美しさ！　王樣は、つくづく感心して、

『お前は、眞實、名醫だな。では褒美を。』

とのことで、數々の品を賜はつた。聞く者は、

『十六七年の歳月こそ、御褒美を頂くべきだのに。』

と噂し合つた。

♡事は、一朝一夕に成就するものではない。多年の勉强に待たなければならぬ。世の成功を望む者は、歳月を忘れないやうにせよ。

恐しい頑固者

＝止まらぬ水の姿を見習ひて
　いさらさつと世を渡るべし＝

素敵滅法界に美しい妻が、夫の不縹致を嫌つて、家を逃げ出す時、どこからか、女の死骸を持つて來て、

『旦那が歸つて來たら、內儀さんは、この通りに死にましたと、然ういつてお呉れ。』

と女中にいひ置いた。そこへ、夫が歸つて來て、女中に聞くと、ひどく嘆き悲しんだが、詮ないことゝ諦めて、やがて火葬にし、その骨を袋に入れて、肌身放さず持つてゐた。一方、妻は、他國で散々難儀をした揚句、三年目に歸つて來て、

『はい、たゞ今。』

と澄した顏でいふ。此方はびつくり、

『お前さん、誰？』

『妾、貴方の妻ですわ。』

『否、私の妻は、三年前、急病で死にました。』

『所が、それは、斯く斯くの次第で。』

と幾度もその仔細を話したけれど、夫は、頑として肯き容れず、果ては、妻を突き出して、

『えゝ、この騙り者め、一昨日來い！』

♡妻の不届きは、いふ迄もないが、夫の頑固、これ亦た、驚いたものではないか。一旦、間違つた考へを起して、それを眞と信じ込むと、他から忠告されても、異見されても、馬の耳に念佛の喩へ、何うしても肯き容れない。

人の眼犬の眼

＝忠孝も忌はしものと見ゆるなり
獸の眼もて向ふ故には＝

内傷眼の爲めに、俄か盲人になつた男が、眼科醫の許へ診て貰

ひに行つた。醫者は、

『よしよし。俺が治して上げる。』

と引き受けて、兩眼を抉り拔き、燒酎できれいに洗つて、吊し柿のやうに絲で繫ぎ、竿にかけて干して置くと、鴉が目つけて、その一つを咥へて行つた。醫者の驚いたことはない。けれど、工夫もあるもので、庭に寢てゐる犬仔の一眼を拔き取り、彼の一眼と一對にして、男の眼の穴へ、ことりと嵌めた。後刻、

『何うかね、見えるかね。』

『はい、よく見えます。』

醫者は、笑ひながら、

『何か變つたことはないか。』

と尋ねると、

『變つたこと？』

と考へて、

『只今、便所へ行きまして、下を覗きますと、右の眼では、汚く見え、左の眼では、好ましく見えました。』

と答へたとか。

♡その筈、左の眼は、犬の眼である。人間、若し、人間の心を失つて、獸類のやうな考へになると、これ迄、汚ならしく思はれてゐた嘘吐き、惡遊び、

人の物を盗ることさへもが、つひ、好ましくなつて來る。

鬼の棲む空屋

＝鬼といふ物は世界のどこに棲む
疑ふ人の心にぞ棲む＝

町内では、

『彼處の空屋には、鬼が棲んでるげな。』

と專らの噂である。

力自慢、膽力自慢の男が、

『よし、俺が一番、實否を確かめてやらう？』

と、一夜、その空屋へ行つた。時に、今一人、同じ強がり屋があつて、これ亦た、空屋へ出かけ、門を開けて入らうとすると、前の男、

『それ、鬼が來た。』

と、一生懸命、扉を押へる。後の男も、中にゐるのを鬼と合點し、

『こゝ開けられては大變々々！』

と、嚴しく扉を押へる。二人が爭つてゐる中に、何時しか、夜が明けた。扉の隙間から、覗き合ふと、二人は、互ひに知合の中である。驚いて、

『何だ、お前は、熊さんぢやないか。』

『然ういふお前は、八さんか。これはこれは。』

とばかり、暫く言葉もなかつたといふ。

○これが、疑心暗鬼を生じたので、鬼は、空屋に接まないで、却つて熊さん、八さんの頭の中に接んでゐた。彼奴は悪い、此奴が間違つてゐる、と怒るその彼奴、此奴は、果して悪いのやら、善いのやら、疑心暗鬼の理屈やら、決して判つたものではない。

大名の新奇術

＝恐ろしき物の数々ある中に
屋根の洩るのと馬鹿と奢りと＝

或る大名、多年、贅澤に暮して來た報ひは覿面、火の車が廻り出して、二進も三進も行かなくなると、家來を集めて、

『斯うなつては仕方がない。今後は、極度に儉約するから、其方共も、我慢するやう。』

といひ渡した。その後の食事は、成程ひどい。大名だけに、膳椀、皿、小鉢、何れ、綺羅びやかな品ばかりだが、ついてゐるのは、鰯の乾物が關の山で、それもほんの一口限り、錦手の皿を見つめては、すつぽり飯をやるのであるから、殆んど喉へも通らない。家來の中、

『こんな物を食は更れてゐたちや、今に我々が乾物にならあ。』

と呟く者があると、給仕の女中、氣の毒げに打ち眺めて、

『だけど、御心配なさいますな。殿樣は、智慧のあるお方ですもの、きつと新奇術をお考へになりますわ？』

『どんな奇術かね？』

『定つてまさあ、食ふ物なしに生きてられる奇術ぢやありませんか。』

♡仙人なら、知らないこと、人間、食はずに生きてはゐられない。判り切つた話である。不思議なるかな、多くの人が、食へなくなるやうと、贅澤な眞似をしたがる。

無法者の禍ひ

＝追ふも憂し追はねば猫に浚はるゝ
皿を引くをば善しと定めん＝

或る男、頭がすつかり、禿げてしまつて、一本の毛もない。無法者がそれを見て、

『やあ、君の頭は、益々禿げて、益々光るね。何うだ、この杖で打たせないかね？　電氣燈なら碎けるが、何、頭だから大丈夫だらう。』

と嘲ける。

『勝手にしろ。』

『よし、勝手にするぞ。』

といひざま、ぐわんと打つ。

『勝手にしろ。』

復た打つ。五つ六つも打つと、頭が傷れて、夥しく血が流れる。傍の人が見るに見かねて、無法者を追つ拂ひ、男に、

『何故、逃げなかつたんだ？　疵の出來る迄、頭を打たれて、手出しもしないなぞは、お前、何うかしてやしないか。』

『彼奴は、馬鹿者でさあ。逃げる價値もありません。』

『そんな馬鹿者に頭を打たれて、平氣でゐるとは、お前こそ、底の知れない馬鹿者だぞ。』

○人と爭ふことは、古人の堅く戒しむる所であるか、といつて、甘んじて

無法者の無法を受けるのは、愚としなければならぬ。相手になるには當らない。逃げるのである。避けるのである。「猫追ふより、皿引け。」の譬へもある。

鶯鳶の鳴眞似

＝思ひ知る花の七日に浮く人を
月の晦日に沈む人とは＝

昔し、印度の或る地方では、祭禮に、蓮の花で女の髪を飾る習慣があつた。だから、祭禮前になると、蓮の花一輪が、五圓の、十圓のといふ値段になる。或る貧乏人の妻が、夫に向つて、

『良人、蓮の花を買つて下さいね。でなきや、妾は、この家を出

て行きますよ。』

と強い談判に、夫は、大きに閉口したが、不圖、氣がつくと、自分は、鴛鴦の鳴き真似が上手である。可し、鴛鴦になつて行つて、王様のお濠の蓮の花を盗んで來やう、と太い考へを起して、その夜、遲く、お濠の中へ忍び入り、花を搜して、彼方此方泳いでゐると、早くも番人に目つかつて、

『誰だッ？　何者だッ？』

との聲がかゝる。貧乏人は、面喰つてしまつて、頓には鴛鴦の聲が出ない。到頭、捕まつて、二つ三つ打たれた上に、王様の前へ引つ立てられるとなると、

『こゝ、こゝ。』

と頻りに、鴛鴦の鳴き真ねをやる。番人は、

『馬鹿め！』

と叱つて、

『今更、そんな聲を出したとて、追つ着くことか。貴様は、餘程の間抜けだな。』

♡平生、遊んでばかりゐて、晦日間際に、俄に騒ぎ出す者は、この貧乏人のお仲間である。年の暮れに騒がないやう、平生から、注意これ肝腎と知るがよい。

一つ限りの卵

――怠らず行かば千里の外も見ん
牛の歩みの縱し遲くとも――

命よりも金が惜しいといふ男、病氣に罹つて、已むなく醫者に診せると、

『藥は要らない。滋養物を攝つて、體を强健にすれば、忽ち癒る。それには、鷄卵がいゝだらう。』

とのこと。早速、鷄卵を買つて飲んだ。四五日經つて、醫者が再び容體を診ると、少しも快くなつてゐない。不思議に思つて、

『鷄卵は飲んだかね？』

『はい、飲みました。』

『毎日、幾個位ゐづつ飲んだの？』

『毎日、幾個？……そんなに飲むものですか。過日、お言葉に從つて、早速、一つだけ飲みましたが、それ限り、飲みませんよ。』

との言葉。醫者は呆れて、

『何程、よく効く鷄卵でも、たつた一つで、何うして驗しが見えるものか。毎日、七八つは飲まなきや駄目だ。』

病人のいふことが變つてゐる、

『鷄が卵を產むやうに、然う容易く、金を產むことは出來ませんからねえ』

♡何程、鷄卵が滋養物でも、一つだけでは、何にもならない。一つだけの善行、

一日だけの勉強、それに何の効能があら？　何事も、永く繼續してこそ、初めて見るべき結果がある。

秘密の約束！

＝禍ひの門を開きて我れと我が敵を誘ふ人ぞ儚なき＝

或る軍團長が、夜半に突然命令を下して、部下に出發の用意をさせた。どこへ、何しに出かけるのだか、一同には判らない。副官が、

「して、御計畫は？」

と尋ねると、

「お前は、秘密を守ることが出來るか。」

「はい、きつと守ります。」

「秘密を守ることは、軍人の心得中、最も大切な一つぢやな？」

「はい、然やうで。ですから、私は、きつと秘密を守ります。」

と誓ふと、軍團長は、横を向いて、

「然うあるべきぢや。乃て、俺も、秘密を守るとしやう。」

○一から十迄、糞隱しに隱すのは、宜しくないが、秘すべきを秘さないのも、これ亦た、不德の一つである。世間、この不德を犯さない者はない。流石に他聞を憚かつて、

『君、これは、秘密だよ。いつてくれては困ろがれ……』
と前置きして、人に秘密を誓はせるが、自分自身、秘すべきを秘さないので
あるから、聞き人も、やはり、秘さないで、次から次へと洩らしてしまふ。昔
の關所役人が、關所を守つたやうに、堅く口を守るのでなければならぬ。

無理なる祈り

＝我れといふ小さき針に蜜蜂の
人を刺すとて身を殺すなり＝

或る時、蜜蜂が神様へ一蜜の壺を献上した。神様は、大層のお
喜びで、
『奇特に存ずる。この褒美には、何事に寄らず、汝の願ひを叶へ

て遣はす。遠慮なく申し出よ。』
との仰せに、蜜蜂は、あれか、あれかこれかと考へた末、
『一刺し刺せば、どんなものでも死んでしまうやうな、鋭い針を
お授け下さいまし。』
とお願ひした。神様は、願ひの無理なのに驚き、且つ、悪感を
催しながらも、一旦、約束した以上、取り消すわけには行かぬ。
大に迷惑がりつゝ、
『では、その針を遣はさう。けれど、蜜蜂よ、その針で人間など
を刺すと、針は、忽ち抜けてしまつて、お前も、命を取られるぞ
よ。その心得で使ふがよい。』

と注意された。蜜蜂が、現に持つてゐる針は、即にち、それである。

♡諺に、「人を詛へば穴二つ。」といふ。人を害しやうとすれば、必らず、自分も害される。所謂る因果應報なるもので、理の最も見易い所であるが、世間には、近眼者流が多くて、左右、人を害したがり、而も、その事が自分の利益になるやうに思ふ。その愚は、この蜜蜂と擇ばない。

怒りん坊さま

＝私の心を捨てゝ聞く時は
人の言葉は我が鏡なり＝

お寺の和尚、綽名を怒りん坊と申し上げる。大勢の集まつた席

で、端なく坊さまの噂が出た。恰度、通りかゝつた坊さまは、皆なの話聲を聞きつけると、いきなり、飛び込んで來て、手當り次第に打つてかゝる。一同、それを取り押へて、

『こ、れ、何をしなさる？』

『何も糞もあるか。俺のことを、よく怒るから怒りん坊だの、疎卒かし家だのと、俺が何時怒つた。何か疎卒かしい眞似をしたか。』

と敦圍くと、此方は、大笑ひして、

『そ、れ、そ、れ、そんなに怒つてゐなさるぢやないか。こゝにゐる大勢の中で、誰が貴方の噂をしたか。それも確かめないで、無闇に拳骨を揮り廻しなさるは、即はち、疎卒かしい證據でせう。』

といふと、流石の怒りん坊さま、返す言葉もなく、たゞ、苦笑ひをにやりにやり！　逃げるやうに立ち去つたとか。

♡人には眼かある、烏を鷺とは決して見ない。人に謗られ、悪くいはれて、ぶんぶん、腹立つのは、まことに小人の爲である。寧ろ人言を鏡として、我か行狀を改めるがよい。

天王山上の蛙

＝我が善きに人の惡きはなきものぞ
人の惡きは我が惡きなり＝

京の蛙が、大阪見物を思ひ立つて、のそのそ這ひ出し、途中、

天王山へ登りかゝると、大阪にも、京見物に出かけ、蛙があつて、双方、山の頂上で出つ會した。何がさて、仲間同士である、直に馴れ合つて、互ひにその志を告げ、さて、一方がいふには、

『こんなに苦しい思ひをしながら、やつとまだ半分道だ。この上、目ざす京、大阪迄歩いたら、足腰が堪るまい。こゝは名に負ふ天王山の頂き、京、大坂を一目に見渡す處と聞く。何とこゝから見物して、足の痛さを助からうぢやないか。』

斯ういふと、他の一方にも異存はない。乃で兩方が立ち上り、足爪立てゝ、きつと向ふを見渡して、

『何だ、音に聞えた難波名所も、京に少しも變りはない。』

『否、京も大阪と同じだ。これは……』

と失望して、各自、古巣へ這ひ戻つたげな。

♡蛙どの、蛙どの、お前の目はどこに在る？背中についてゐるではないか。

然し、吾々人間仲間にも、お前によく似た手合がある。自分の目の吟味もしないで、人を彼是評する者、此奴、お前の連中である。

此榮螺十六文

＝我れといふ小さきものを恃みつゝ

俺が顔する人ぞ可笑しき＝

榮螺といふ貝は、至つて丈夫な貝で、その上、蓋をさへ持つて

ゐる。鯛や鱸が羨ましがつて、

『貴公は、實に、用心堅固で、安心な身の上だ。』

といふと、榮螺は、ありもしない髭を撫でて、

『何、お前方の思ふ程でもないがね、然し、斯うしてゐれば、まんざら、難儀なこともないよ。』

と下卑自慢の折柄、ざんぶといふ水音！　榮螺は、びつくり、蓋をして、

『はて、今のは何だらう？　網か知ら？　針か知ら？　だから、要害が肝腎だ。それにしても、鯛や鱸は、何うしたかな。多分、漁られたことだらう。可哀さうに……』

と思ふ中、大分、時刻が移り、戸外も静かになつた様子。

『もう可からう。』

と、蓋を開けると、何となく勝手が違ふ。

『これは……』

と驚き、よくよく見ると、この榮螺三錢五厘！　あはれ、正札つきになつてゐた。

♡人は、必らず何ものかを恃む。智慧を恃み、才を恃み、藝を恃み、健康を恃み、力を恃む。けれど、その恃みにならないことは、榮螺の貝と同じである。正札つきにならないやう、左右、用心が肝腎である。

壺中の金米糖

＝我が物と思ふ心を思ふかな

それだにも猶ほ我が物か否＝

婚禮の席で、酒嫌ひの爺さんが、手持ち無沙汰で、欠伸ばかりしてゐると、主人が氣をつけて、金米糖の入つた南京古染付けの壺を催めて、

『一つ、召し食れ。』

といふ。甘黨の爺さん、

『これは結構！』

と、手を突っ込んで、摘み出さうとすると、手頸が固く詰つてしまつて、引っ張つても、こじ廻しても、何としても抜けない。

さあ大騒ぎ、一同、酔も醒め果てた時、座中の一人が、

『何程、壺が大切でも、豈夫、この方の手を切るわけにも行くまい。』

といふが否、煙管は振り上げ、はつしとばかり打ち下すと、壺は砕ける、座敷一面、金米糖の花が散る。然し、爺さんは助かつた。

『先づ安心！』

と、皆なで爺さんの手を見ると、これはしたり、手に一ぱい、金米糖を掴んでゐた。

♡掴んだ金米糖を放しさへすれば、手は自由に抜けたものを、掴んだら放さな

いといふ、慾張り爺さん、實に呆れたものではないか。掴むものは、金米糖ばかりではない。金を掴んだら、放さない……義理か惡からうが、人情に外れやうが、一旦、財布へ入れた以上、金輪際、放さないといふ强慾者は、天竺の横町邊りにはたんとある。

仙人の御挨拶

＝金をのみ欲しがる人ぞ可笑しけれ
黄金が飯の代りやはする＝

夏の一日、惡戯盛りの河童小僧が二人、村の小川で水泳ぎをして、川の底から、一握りの髪の毛を發見した。

『何だらう？』